71
496

始

41-496

雜記帳

大正
4. 5. 21
内交

71-496

エトワアルの廣場

與謝野晶子

土から俄に
孵化して出た蛾のやうに、
わたしは突然、
地下電車から地上へ匍ひ上つた。
巨大な凱旋門が眞中に立つて居る。
それを繞つて

マロニエの並木が明るい緑を盛上げて居る。
そして人間と、自動車と、乗合馬車と、
乗合自動車との點と塊が
命ある物の
整然とした混亂と
自主獨立の進行とを、
斷間なしに
八方の街から繰出し、
此處を縱横に縫つて、

斷間なしに
八方の街へ繰込んで居る。
おお此處は偉大なエトワアルの廣場だ……
わたしは思はずじつと立竦んだ。
わたしは思つた、——
これで自分は此處へ二度來る。
この前來た時は
いろんな車に轢き殺され相で、

怖(こは)くて、
廣場を横斷する勇氣が無かつた。
そして輻(ふく)になつた路を一つ一つ越えて、
モンサウ公園へ行く路の
アヴニウ・ウッスの入口を見附ける爲に、
廣場の圓(えん)の端(はし)を
長い時間ぐるぐると歩いて居た。
どうした氣持のせいでか、
アヴニウ・ウッスの入口を見附け損(ざこな)つたので、

凱旋門を中心に
二度も三度も廣場の圓(えん)の端(はし)を
馬鹿らしく歩き廻つて居たのであつた。
けれど今日(けふ)は用意がある、
わたしは地圖を研究して來て居る。
今日(けふ)わたしの行くのは
バルザック街の裁縫師(タイユウル)の家だ、
バルザック街へ出るには、

この廣場を前へ
眞直に横斷すればいいのである。
わたしは斯う思つたが、併し、
眞直に廣場を横斷するには
縱横に斷間なく馳せちがふ
速度の疾いいろんな車が怖くてならぬ。
廣場へ出るが最期
二三歩で

轢き倒されて傷をするか、
轢き殺されてしまふかするであらう……
この時、わたしに、突然、
何とも言ひやうのない
睿智と威力とが内から湧いて、
わたしの全身を生きた鋼鐵の人にした。
そして日傘と嚢とを提げたわたしは
決然として、馬車、自動車、

乗合馬車、乗合自動車の渦の中を眞直に横ぎり、
あわてず、走らず、
逡巡せずに進んだ。
それは佛蘭西の男女の歩くが如くに歩いたのであつた。
そして、わたしは、
わたしが斯うして悠々と歩けば、
速度の疾いいろんな怖ろしい車が
却つて、わたしの左右に
わたしを愛して停まるものであることを知つた。

わたしは新しい喜悦に胸を跳らせながら、
斜めにバルザック街へ入つて行つた。
そして裁縫師の家では
午後二時の約束通り、
わたしの繻子のロオヴの假縫を終つて
若い主人夫婦がわたしを待つて居た。

「雜記帳」は名の示す通り自分の雜記帳にある折折の感想文から數篇を擇びました。曩に公にした「一隅より」の姉妹篇としてお讀み下さい。もつとも「一隅より」の時に比べて自分の思想に多大の變化のあつたことは此書が語つて居ります。

序に代へて、自分の近頃の思想を適切に表現した詩篇エトワアルの廣場」を添へました。

著者。

目次

男と女　一

理智に聽く女　二〇

私の文學的生活　三九

偶感と直覺と　四八

私の貞操觀　六三

折々の感想　一〇二

櫛笥のうち　一一九

二人の女の對話　一四四

鏡心燈語　二〇六
婦人問題雜感　二六六
自由劇場の印象　二七七
婦人の服裝　二九四
夏の旅　二九六
川　三〇四
秋　三一一

雜記帳

與謝野晶子

男と女

もともと男が女に優り、女が男に劣つて居ると決つた物の様に思ふのは、男に取つては慢に過ぎ、女に取つては謙に過ぎる。男同志を比較して見たなら、隨分智識も情操も意志も普通の女より劣つて居る男の多いのに氣が附くでせう。女に頤使せられて甘んじて居る男もある。女の敢てしない虚言を吐き、女の夢にも思はぬ罪惡の數數を犯す男もある。賄賂を授受するのも官界、教育界、實業界の男子、戰爭を今以て計畫するのも、醜業婦に財力を消費するのも男子

である。無教育、無能、非常識な男も澤山にある。迷信に囚はれた男、生活の道を知らぬ男、勞働に堪ぬ遊惰な男、努力を避る卑怯未練な男も多い事である。女は男の厄介物の樣に思はれて居るけれども、若し一人で社會へ突き出されて何うにか苦境を凌いで自活して行かれる者がどちらに多いかと云へば、それが病人と不具者とで無い以上、女に多いと云ふことは見易い事實で、男は案外意氣地が無い、四十歳を越した男やもめに意氣地の無い人を澤山見受けますが、女の寡婦は概して甲斐甲斐しく生活を立てゝ行く樣に思はれる。囚徒にも行路病者などにも男の方が非常に多いのは誰も知つて居る事實です。父親には子供の養育を全く構はない人があつても、女親に

はそんな冷酷な事は爲し得ない。道德的な方面は特に女の方に强味がある樣に思はれます。

と云つて自分は女を男より優つた物だとするのでは更々ありません。短所を云へば何れにも短所があり、長所を云へば何れにも長所がある。又個人同志で比較すれば必ずしも女が劣るとは云はれないと云ふ事が明かになれば好いと思ふのです。智識の點で概して男が優つて居るのは勿論ですけれど、昔から男は教育が施されてあり、女は殆ど生地の儘で放置せられて居たのですから、其優劣は本來の優劣では無いでせう。磨かない玉と磨いた玉とを比べて一方を玉の質でないと決めて仕舞ふのは間違つた判斷である。教へさへすれば

女の智識も男と對等に發達するだらうと思ふのが私の思想です。過去に於ても現在に於ても敎へられた階級の女は敎へられない男と比べて優つて居る事は勿論、敎へられた男と比べても遜色の無い者が少くない。平安朝の文學で女の手に成つた物の方に今日まで價値を保つて居る傑作のあるのなどは其適例です。文學に關した敎育ばかりを施したから紫式部などの文學者ばかりを出して居ますけれど、男と同じ種類と同じ程度の敎育をさへ施したなら、潛在して居た人としての多角な能力は女にも同樣に顯現するだらうと存じます。其れは現に歐洲の先進婦人の間から實例を示して婦人の科學者などが次第に現はれて參る樣です。自分は之に就いてさまで危惧を感じま

せん。唯だ少しでも早く我國の婦人が男子と對等に敎育せられる機運、女子自らが自己の無智に驚いて進んで男子と同程度の學術を修めようとする機運の到來することを祈つて居ります。

○

それで今から四五十年の間は己が位置を自覺した新しい女が殖えると同時に、女子の高等敎育が上すべりをせずに深く普及して行けば其れで好い。世間の識者も其機運を作ることに骨を折つて頂けば好い。近頃女子に參政權を與へることの可否などを論ずる聲がありますけれど、然う云ふ問題の討議はまだ我國の婦人の文明程度から云つて早過ぎる迂濶な問題である。どちらかと云へば現在の樣に自

尊心の乏しい男子に選擧權を與へたことの可否でも討議する方が日本人には適切な問題であらうと思はれます。私の想像では將來どの社會で活動するにしても男女で區別するよりか、ひとしく個人としての智識なり技能なりの大小優劣に由て待遇が定まる樣に成つて行くでせう。其れは先進の文明國では然まで遠いことで無いらしい。遲鈍な女の中でも殊に遲鈍な我々日本の女は、今から非常な發憤と努力とをしないと、何時までも世界の大勢に落伍せねば成らない非運が續きませう。併し我國にも斯う云ふ點に自覺のある若い婦人が此兩三年非常に激增し、人眞似でなく、虛榮を逐ふのでなく、中心から個人としての自尊の爲に男子と同程度の學術を自修して、有ら

ゆる方面に活動しようと心掛ける健氣な人達のあるのは嬉しい現象です。文部省の敎育制度などは何うでもよいとして、然う云ふ健氣な人達は外からの奬勵を待たずに獨力自修を以て粘り强く目的に向つて進んで行かれる樣に見受けます。物事の解つた父兄や女學校の先生が其れを奬勵せられる事の殖えて行くのも喜ばしい。又概して一般の敎育ある男子が屈從主義の人形の樣な良妻賢母に慊らなくなつて、自己の思想感情を理解することの出來る女子を要求し、高等女學校卒業後猶三四年をそれらの敎養に費した女子を歡迎する氣風を生じたのも、女の獨力自修に好都合であると思ひます。

○

私は人物批判の上に男女の區別を要しないと云ふ理想から考へて其人の能力に適した物事を擇んで勤勞するならば、あらゆる學問と大抵の職業とは女にも男とひとしく出來相であるが、唯だ現在の教へられざる女には其實力が缺けて居る丈の事であると思ふのです。其處まで多數の女の頭腦を開發するのは非常な變革であつて少くも四五十年の後を期せねばなりますまいが。他人の爲でなく婦人自身の幸福の爲である以上、若し今日でも其れ丈の實力があり、又は其れ丈の實力を養ひ得ると云ふ抱負のある女は、短い人生に遠慮氣兼は要らない、進んで自己に適した手段で高等な智識と感情と意志とを自修し、家庭及び社會に實際の活動を試みて、婦人が男子と對等

の能力を持つて居ることを先づ自ら立證して頂きたい。婦人を男子の副物として體よく在來の臺所に押込めて置かうとする論者から、婦人には姙娠とか月經時とか分娩とか特別の生理變化がある爲め、男子の樣には勉學も勞働も出來ないものだと論ぜられますが、其等の事は在來の如き無自覺な凡庸婦人でない以上、さまで女子の活動を妨げるものでは無からうと思ひます。如何にも男子には然う云ふ生理的の變化で時間を費すことが無いのは明かですけれど、男子が一年中に勞働以外の諸種の遊惰な行爲で空費する所の時間は、女子が其等の生理的變化の爲に費す所の時間に比して非常に多い。女子は月經時でも姙娠時でも全く遊惰に時を費すことは無く、必ず何等

かの勞働をして居りますから、實際に空費する所の時間は到つて少いのです。時間を空費する不良な習慣の多い男子が教育と自覺との爲にあれ丈の人格を鍛へ上げられるとすれば、時間を空費することの少い女子が其時間をもつと自己の教育と自己に適した有効な勞働とに費すなら、男子と對等な人格の開展が出來るに違ひないと思ひます。

○

房州とか紀州の熊野とかの漁村の女を見て來た人の話や、自分が知つて居る鄕里の農家の女などに就て考へると、女にも力仕事は十分に出來る樣です。一體に勞働の精力は女の方が長く續くと云ひま

す。志摩の國の海女などの樣に海に潛る事は男の潛水夫に出來ないと云ひます。然う云ふ荒い勞働を多數の低い階級の女は常にして居るのですが、中流の生活の女も今少し日常の座臥進退を意識して活潑にするなら恐らく男子の從事して居る力業の何れをも學べない事は無いでせう。卽ち智力も體力も敎育と練磨とに由つて男と對等に成り得ることは、十分に豫想せられる事だと思ひます。併し之は、女は本來男に劣つたものだと云ふ議論を破る爲に申す事で、私は女の力業を好む者ではありません。力業の言ひ換へれば腕力と申す樣な事はどちらかと云へば、文明人に餘り奬勵すべき性質のもので無く、男子に於ても腕力が强いと云へば幾分野蠻な氣味が聯想せられ

て一種の羞恥と厭惡を覺えますが、まして長い黑髮と白い柔かな腕とを持つた女に望むべき事で無いのは明白です。正義を擁護する爲に腕力（卽ち戰鬪力）が必要であり、生產の爲に膂力が必要であつた未開時代もありましたけれど、機械が發達して動力を電氣や瓦斯に仰ぐ今後の世界では體力の奬勵は或程度に止めて置かねばなりません。身長が伸び、歩いたり走つたりする事が男子と對等に出來、男子と齊しい思索と就業とに堪へられさへすれば其れで充分だと思ふのです。

女子が自己の能力に適する以上、また其れで自己及び社會生活に貢獻がある以上、如何なる種類の職業に從事してもよいと私は考へ

る。「女」として從事するのでなく、「人」として從事するのである。何事も男の樣な業は出來ないと蔑視せられた女子は、漸次其れ丈の實力を養つて有らゆる男子の事業にも立派に從事し得る實蹟を示す樣にしたい。女子の參政權運動が世界の各地に起つて居るのなども大に意味のある現象として私は考へ、また或國で女子が既に代議士となり、官公吏となり、大學教授、辯護士となつて居るのを怪まない。昔は女子の帝王や酋長さへ少くなかつた。我國がまだ少數の女教師、女醫、婦人記者、女子事務員、女子判任官、女子教誨師、女流文學者を有つて居るに過ぎないのは心細いと思ひます。之は決して女子のみの問題で無い。其れ程低能な女が國民の半數を占めて日

本の國家が出來上り、さう云ふ無智無能な女を妻とし、姉妹とし、母として日本の男子が生活して居ると云ふことを慘めだと感じるのです。

女子が家庭の外で働くことを嫌ふ論者があります。之れは男は優つたもの女は劣つたものと根據も無く決めて仕舞ふ僻見が先入主となつて、引いて女は家庭外の活動に參加する能力が無いと斷ずるのであつて、女の個人個人の能力を研究した上の議論で無く、其の能力を十分に培養し發揮させて見た上の議論でもありません。其れから論者は婦人對家庭の關係を餘りに過重して居て、婦人が生涯の貴重な時間を全く之れに費しても惜しく無い物の樣に思つて居る。

其れ丈大切な物なら女ばかりに任さうとせずに、なぜ智能の優つた男子に云ふ男自ら主婦の役目をも負擔しないのかと言ひたくなります。男の內心では其實家庭と云ふ物を殆ど尊重して居ず、無學な女に任せて置けば十分だと考へて居るに關らず、女に臨む時丈は家庭の大切な事を說くのです。その證據には男子が放逸な行爲に由て家庭の清淨と平和とを攪亂して居ることが夥しい。女の貞操を監視する樣に若し男の貞操を取調べたなら、十六七歲以上の男子は大部分破倫不淨の人であるのを免れません。親に對し、妻に對し、子女に對して家庭の平和の柱石とならうとする心掛が多數の男に缺けて居ることは明白です。女に大切な物は男にも同じく大切な筈である。女に

ばかり家庭を重じさせようとするのは、却て家庭を破壞する思想であつて、決して幸福な家庭を完成する道で無いと考へます。

○

自分は家庭の價値を正しく解したい。從來の家庭の樣に窮屈で、陰氣で、無意義な物が我々に適した家庭で無いと同時に、論者の樣に女が一生の時間と精力とを其れに傾注せねばならぬ程大切な物でも無い。家庭は人間の巢である。一對の男女卽ち夫婦を基礎として成立ち、それに子女と雇人とが附屬し、起臥飮食より初めて相愛、敎育、安息の生活をなす場所である。對等に敎育せられた夫婦は家庭を巢として之から出發しつゝ個人的及び社會的に自己に適した職

能を以て活動する。その職能が夫婦互に類似して居る場合には同一の稼業に從事することも出來るが、然うで無い場合は互に長ずる所を以て各別の職業に就くのに何の不思議も無い。從來の女は全く無能な者が多かつた爲に價値の少い勞働をも價値のある物の樣に誤解して、無益に忙しく時間を費して居ましたが、今後次第に激增する敎育ある女は、勢ひ家庭のみでは其精力が非常に餘り、加ふるに從來はだらしの無かつた臺所その他の雜用を簡潔と敏活とに處理する事を知つて居る爲に其れから剩し得る時間も非常に多く、殊に都會では文明の設備が進步するに從ひ、婦人の無駄な手數を省くことが非常に多くなつて行き、論者の考へる樣に割烹とか裁縫洗濯とか云

ふ事は、其れ程重要な勞働で無く、女の仕事のほんの一部にしか過ぎない。女は其れを着々と片附けて、其上に精力と時間とに多大の過剰がある。其れを以て男子と對等に自己發揮の活動に從事しようとするのは婦人否人間の大進歩だと申して宜しいでせう。

○

家庭以外で無く、家庭以上にも働かうと致すのです。男にせよ、女にせよ、家庭にばかり閉ぢ籠つて居るのは喜ぶべき事でない、どちらかと云へば家庭以上の活動を本位とし、其れに重きを置くので人類の幸福は増して參ります。併し人には適不適があつて、家庭以上に出ることの出來ない天分の男女は、わざわざ家庭以外の活動に

關係する必要はありません。又家庭の仕事も決して輕視すべきものでなく、子女の多い家にあつては家庭教育の必要から成るべき夫婦の何れかが一人は家庭に留つて、其境遇に適した職業を選ぶ樣な斟酌が要りませう。其等の事は其家其人の各別な事情に放任して置きたい、他から斯うせよと一概に決めて掛かるべき性質の物で無いと思ひます。論者は女教師とか女子事務員とかの生活を特例の樣に扱はうとしますけれど、自分は職業に特例と云ふものがあらうとは思はない。個人個人が其天分と教育と境遇とに適應した生活の形式を自由に選擇するのが現代の常例であつて、武士は何時までも武士、町人は何時までも町人、女は何時までも臺所用と思つて居たのは昔

の事でした。慈善事業と云ふ様な消極的な方面にだけ女子の活動を許さうとするのは、今後の婦人を諒解しない議論かと慊らなく思ひます。家庭に於ても社會に於ても男と女とは協同すべきものである。租税は女からも徴收するが、選擧權を初め政治上の權利は男の獨占であると云ふ現象は、將來に於て必ず廢滅するものである事が豫想せられます。

理智に聽く女

○

わたしは曾て雜感を書いた中で「毒蛇と接吻する事に由て常に勇

氣づけられて居る」（拙著「一隅より」參照。）と述べた。舊約聖書に人の始祖アダムの妻イヴが、蛇に敎へられて禁園の木の果を良人と共に食つた有名な神話がある。蛇は何と敎へたか。「爾等之を食ふ時は爾等の目開け、爾等神の如くなりて善惡を知るに到る」と敎へた。其木の果は「食ふに善く、目に美はしく、且つ賢からんために慕はしき」ものであつた。蛇の言葉に勵まされて其れを食つた新しい男女は、忽ち俱に心の目が開いて兩人の裸體で居る事を耻ぢ、無花果の葉を綴つて裳を作り下體を掩ふに到つた。

「婦人は感情の動物である」と云ふ男子の批評を受けて在來の婦人は甘んじて居た。純粹の感情、本能の儘の感情は盲目である。「感情

の動物」と評せられるのは「婦人は不具者だ。白痴だ」と評せられるのと同じである。盲目であつた婦人は此人非人扱ひにせられた批評に對して羞恥を感せず、反つて榮譽の如くに思つて居た。

女は男子に比べて永久低い階級に立つべき者、獨立を許されず從屬者たるべき者、貞操を強ひらるべき者、又其貞操を男子の娯樂に蹂躙せらるべき者、優美纖弱なるべき者、斯樣なる因襲と繫縛と苦痛とを受けながら、わたし達の母や姉が恥辱を感じなかつたのは、低級なる感情生活に甘んじて、自己を反省し自己以外の廣い天地を見渡す智慧の目が閉ぢて居たからである。

今時舊式な「柔順」を以て女子を壓へ附けようとする人達から見

れば、女子に高等な「理智」を授けるのは禁斷の果實を食へと勸める惡蛇の聲かも知れぬ。併し其れを制する時機は既に遲い。若い婦人は教育せられた。わたし達は事毎に理智の蛇に聞いて居る。イヴが裸體で居た事をアダムと共に恥ぢた如く、わたし達は自らの無智を恥ぢると共に、其無智なる女を共同生活の伴侶として居る男子の爲にも併せて恥ぢて居る。

○

理智の目の開き掛けた女、謂ゆる自覺ある女の心持は最早因襲に囚はれて居ない。舊き道德より出でて新しき道德に生きる。他の形式に律せられずに自らの精神に自らを律して行く。自らの精神を鍛

練する最上の要素は理智である。理智は有らゆる感情を精錬して、新しく、清く、高く、且つ濃かに醇化する。理智は又意志を鍛え堅めてねばり強い執着力と活潑な敢爲の勇とを與へる。

理智に聞く女の心持をもつと細かに述べて見たい。第一にわたし達は性の上に偏つた思想を持たない。人類の半數を占むる女は男子と對等の物、卽ちひとしく「一個の人だ」と思ふ。女であるからと云つて特に卑下すべき道理の基礎を見出さない。女子が姙娠と育兒とに由て身を勞し、早く老い、命を縮めて來た過去の歷史だけを見ても、共同生活の上に女子の負擔が男子の其れに比べて優るとも劣らない事は明かである。男子の如く政治や學問や戰爭に參加する事

が出來ないと云ふ條件を以て女子を卑まうとするのは偏頗である。況や古代に溯れば政治と戰爭とに偉勳を樹てた婦人の事例も多い。我國の古代史丈にでも女帝、女酋、女軍の事蹟は顯著である。今も山海の僻地ほど漁農其他鑛山の勞働者等の間に、體力の逞しい幾十萬の勇婦が現存して、わたしの欲せぬ事ながら、若し其等の勇婦に武裝をさせて軍隊教育を施すならば、伊弉諾尊の軍を苦めた出雲の女軍、神功皇后、巴御前は物かは、希臘上代のアマゾン族にも劣らない巾幗師團が幾つも出來上るに違ひない。學問に就ても然うである。女子を解放して其方面へ發展する事を奬勵し、之に男子に假した丈の年月を與へるならば、男子と拮抗し得る程度に到る事は十分

信ずべき理由がある。其れは從來社會の壓迫を受け乍らも自然に特發した東西の女流才人を見ても保證せられるのである。又史上に名を留めた女流政治家も東西に散見する。近き將來に歐洲の先進國で婦人參政權を許す日が來るならば、賴朝の妻以上の婦人政治家も其等の文明國に數多く見る事が出來るであらう。近刊の「スバル」を讀むと掠鳥通信の中に、市長以下の役人に悉く女の當選した歐洲の某國がある。警察の事務が大に振ふので酒と博奕とを職業にして居る男子が戰慄して居ると云ふ報道を見た。從來男子の獨占であつた其等の公職にも女子の能力は不適當でないことが追々證明されるであらう。維新前まで婦人が敎壇に立つ習慣の無かつた我國にも、現に

多數の女敎師達が敎育上の効果を擧げて居る。女子の職業は横に擴がる許でなく竪にも擴がり得ると思ふ。

○

女子か家庭内の娼婦、高等乳母、高等婢女の位地に留る事なく、新しき自覺の生活に入つて其能力を精神物質二面の有らゆる勞働に使用し、男子との協同生活を幸福にする事が出來るとすれば、此自覺よりして新しい女は男子と對等の權利を要求して好い。生活の上に對等の負擔をしながら對等の待遇を享け難いと云ふのは不合理である。勞働には報酬が伴ふ筈。對等の權利を得て、其權利を行使する事に由て得る幸福を樂んでこそ生甲斐があれ、人の一人として働

き乍ら牛馬に對する如き待遇に堪へられるもので無い。此正しい道理を推して行けば、家庭に於て、社交に於て、國家の法律に於て、遠からぬ將來に女子の待遇が男子と對等に改めらるべき事は明白である。

併し漸と自覺し掛けたに過ぎない新しい現在の婦人は、まだ然う云ふ權利を要求しよう抔と云ふ無法な意見を持つて居ない。わたし達には未だ其資格を具備する丈の修養が缺けて居る。突飛なる行動はわたし達の理智が抑制して許さない。此事は特に識者の御安心を乞うて置く。

○

新しい女の理想は右の如くである。此理想を實現する爲に、わたし達は高い程度の教育を成るべく男子と對等に受けようとする。教育と云ふ意味は學校教育のみを指すので無く、寧ろ、一生を通じて間斷なき自修獨學の心掛を以て我と我が教育する意味なのである。日本には未だ高等教育を授ける女學校も無く、男女の同學を許す大學も殆ど無い。斯う云ふ不便な時代には特に自修獨學の心掛が必要である。女子に讀書欲が熾んになりさへすれば、自然女子の爲に帝國大學を開放する機運を促進する事にも成るであらう。高等教育を受けた青年男子が各社會に分布せられて時代改造の先鋒となる如く、近き未來に高等教育を受けた青年女子が婦人刷新の先驅となる事を

わたしは期待する。

自らを高く教育する目的は自己を磨いて思想と實行とを自由にする爲であるから、一般の新婦人を通じて實踐すべき努力であるが、其上に現代婦人は經濟上の獨立を安固にする爲に、各自の天分に順ひ、或は一科の學問、或は數科の技藝、或は一個の職業を專修する事の必要を感じて、既にそれぞれ實行の端を開いて居る。教育、音樂、新聞雜誌記者、繪畫、文學、醫學等を初め、園藝、養蠶、手藝、官吏、事務員、看護婦、産婆等に到る迄、現に若い婦人の之に從事し、若くは其研究に身を委ねて居る者は多數である。わたしは益々その範圍を擴め且つ高めて、種々の專門學者などをも女子の間から

出す事を望んで居る。其等の學得した所を直ちに生活の資に換へると否とに論なく、其丈の經濟上の獨立を得る資格が備つて居れば、思想の獨立と相待つて一層婦人の位地を堅實にする譯である。德川時代以前の女が親より家産を子女に平分せられ生活の保障を得て居た爲に、心にも無い財産結婚を拒み得た如く、自勞自活の資格に自恃のある女は、男子の收入を當に生きるが如き依賴心を持たずに、毅然たる態度を執る事が出來る。然うなれば女は蔭の物でない、立派に獨立せる一個の人である。

○

如此くにして初めて男子と對等の伴侶となり得る。皆が皆さう云

ふ完備した文明婦人に早速成り得るものでなく、否、いつまでも愚劣な男子が絶えない様に、時代の進歩に追隨し難い女子と、表面に計り新婦人顔をする輕佻半可の女とは永久に殘るであらうが、他人の問題でない事を染々と合點する女子は、何よりも先づ自分一人丈は是非その域に達する事に努力せねばならぬ。世間には既に少數ながら然う云ふ自負の上に立つて居る先進の文明婦人があり、又それに續く健氣な婦人が日一日と殖えて行くやうである。

容色美く生れた女と反對に醜い女とは大分に心理狀態も違へば、一生の運命にも差がある。其れは今後も恐らく然うであらう。けれども今後は容色のみで滿足しない女が殖えて理智で醇化せられた高

い調子の感情や、勇健な意志や、秀いでた學問技藝で競爭する場合には、單に人形美のみを恃みとして居る婦人は心細からう。男子の愛を得るとしても娼婦に對する愛と懸隔の無いものである。男よりは對等の愛を得ず、さなきだに容色は衰へ易いとすれば、一時の幸福も不幸の種とならぬとも限らない。又容色に缺くる所があつても、內心さへ聰明高雅なれば自然その容貌をも美くしく見せるものであるから、自覺せる新婦人は從來の樣に容色に於ても一概に謙遜や悲觀をして居ない。容色を補ふ丈の修飾を精神と技藝との上に加へて其れを恃んで競爭する。男子も高度の感情生活を欲する者程、人形美に赴かずして生きた人間美に集るであらう。今日では未だ醜い

女が餘計に教育せられる傾向があるが、容色の美くしい女程一層内心をも修飾する必要を感じる時代が遠からず來るであらう。

○

結婚と云ふ事を何う見るかと云ふと、今の目の開いた若い婦人は從來の習慣の樣に然う無造作な物とは考へて居ない。從來は一生の大事だなどと言ひながらも、實際には人身賣買とあまり違はなかつた。現に一般に行はれて居る所では財產とか位地とかが結婚の最大條件になつて居て、華族とか富豪とかの子女であれば如何に其子女が無敎育であつても結婚は成立つ。男女雙方の愛情などは更に問はないのである。斯かる結婚が他日種々の不幸な結果を來す實例を多

く見聞して居ながら、父兄も本人も一時の虛榮の爲に財產若くは位地の條件さへ充分なれば無造作に結婚をして仕舞ふ。甚しきは十七八歲の處女が七十歲近い老伯爵に嫁いだ例さへ見受ける。結婚は純なる愛情の相引く事が主要な結合力で、共に家を營み、共に苦樂を分ち、共に子女を育む事に由て一層堅實となるものであるのに、愛情の全く缺けた結婚、愛情の比例しない結婚、年齡が餘りに相違して居る爲に愛情と體質との平衡を得ない結婚などが、何うして生涯の幸福を期し得られやう。

わたし達は結婚を最も重大に考へる所から、力めて將來の不幸の豫知せられない結婚を擇ばうとする。其れには愛情の自由を要求す

る事が第一である。茲に「愛情」と云ふ意味は一時の本能や衝動から起る盲目的な感情でない事を吳々も斷つて置く。經濟上に獨立の資格ある女が財産結婚をしないのは勿論、思想上の獨立を自負して居る女は輕はずみな感情に絆される譯がない。教育ある男子の中に就いて、思想、感情、體質等の我よりも秀れ、若くは我と比例し、併せて我と永久に融和すべき見迄のある人を選擇しようとする。財産の有無は第四第五の問題であつて、有れば猶よし、無くても主要な箇條で無い。互に裸一貫となつても獨立の生活を續け、社會の奮鬪に堪へ得べき人格同志に由て結合しようとする。斯くして兩者に起つた白熱の愛情が謂ふ所の「愛情」である。冷靜な批判選擇の土

から咲いた雪白芳郁の花である。

○

而して此結婚の成立には、自ら省みても他から見ても批難の餘地の無に樣にしたい。其れで結婚前の男女交際は物事の解つた父母師友兄弟などの立會を得て必ず行ふ事を主張する。かの絶對の自由戀愛などを唱へるものは、自己の尊貴を疎かにする輕はづみの女である。わたし達は二十世紀の智慧の果實を喫して目覺めた新代のアダム、イヴを以て任じたい。

若し又斯樣な理想通の愛情結婚が得られない場合には、自衛上結婚を拒むのは道理に合つた措置である。思想上、經濟上の獨立を保

有して居る女は、不幸の豫知せられる結婚に縋つて生活せねばならぬ理由は無い。之が舊い道德から脱して自ら樹てた新して道德に生きるのである。

私の文學的生活

自分は斷えず忙しく暮して居る。月の初から終りまで毎日書き物に追はれて日を送つて居ると云ふ生活は肉體の勞働こそせざれ、其れ以上に力め、其れ以上に苦まねばならぬ生活である。まだ娘で生家に居た頃に考へて居た文學者の生活程氣樂相で羨ましい物は無かつたが、其が我身の實生活となつた今日は大分に趣が異ふ。生家の稼業に從事しながら筆を執つて居た頃は例へば鳥の歌ふ如き氣分で感情の湧く儘自然に歌ふ事が出來た。歌へば其れで滿足であつた。其れを衣食住の生活の資とする必要は少しも無かつた。今は然うで無

い。筆を執ると云ふ事が自分の職業となり、之が直ちに自分と家族とを養ふ基礎である。感情の赴く儘に歌ふ事の樂みは以前も今も變りは無いが、其れのみでは孤獨の生活を送る資力にも足らない。況して一家を支へて行く事は望まれない。それでさまで自ら書くことを欲せず、格別書かねばならぬ要求を自分に感じて居ない種類の物にまで他から賴まれる儘に筆を着ける事となる。通俗に記述が却て自己の特長とする作物よりも衣食の資に換へ易い。意志の弱い文學者、前途の望の多い才人が中途で挫折して戯作者流に墮落して仕舞ふのは大抵之が爲である。

自分は時々之に就いて悲む。源氏、枕草氏の作者達は斯樣な苦し

い生活を知らなかつた。平安朝の貴人才女の生活には藝術と戀愛が融和せられて居た。其時代は夢の樣な時代、娑婆卽ち寂光の淨土と樂むことの出來た時代であつた。固より裏面には政權の消長に由つて日常生活の榮枯浮沈は劇しかつたにせよ、其れが今日ほど肉薄して人の死命を制する事は無かつた。榮枯浮沈をさへ流轉無常の世相と涙を流して諦める事の出來る餘裕があつた。今日の樣に文學を直接衣食の資とせねばならぬ時代に生れた文學者は、終に個性發揮の大事を放擲して心ならぬ循俗の記述にあたら精力と一生を徒費せねばならぬ結果に陷るかも知れぬ。純粹の文學と云ふものは此世紀の生存競爭と相容れずして亡ぶのであらうか。事毎に物質的に進歩

して行く世の中には、愛情と神秘と夢とを母として生れた纖弱い詩歌は育たないのであらうか。

併し自分はまた思ひ返して「否」と叫ぶ。其樣な取越苦勞をするのは自分が現代の一女性であると云ふ自覺を忘れた刹那に射す舊思想の影である。現代に生きようとする勇者は現代に打勝たねばならぬ。衆俗より逃れ走るな。ザラツストラの爲せし如く衆俗の間を行け。超人を學ぶ能はずとするも、せめては衆俗の間を潛行せよ。自分の睿智は斯く命ずる。そこで勇氣を回復した自分は飽くまでも有らゆる方面に自分の精力の許す限り筆を着けようと發憤する。昔のままの純粹の文學などと云ふものが今日に有り得よう筈がない。我

我が今日の「我」から新しい思想、新しい樣式の文學を生むべきである。自己に適した勞働卽ち文學上の製作を衣食の資に換へるのは現代に於て當然の事である。其れを怪むのは文學は何時でも「櫻かざして今日も遊ぶ」空疎な前代の產物であると思つて居るからである。

或人は今日の如き時代にあつては二重三重の生活をせねばならぬと云ふ。其意は假面の生活をせよ、心ならぬ製作も衣食の爲めに忍べと云ふのである。又其意は文學を最高の職能となし置き、衣食の資は泰西の二三流の藝術家が辯護士、醫師、銀行員、官吏などを本業とする如く他の職業より之を得よと云ふのである。都合の好い案

である。自分は他人が之を爲すのに異議は毛頭ない。現に文學を志としながら新聞雜誌記者を本業として居る青年男女も少く無い。自分は其れを敬服すべき心掛だと思つて居る。併し自分の性情としては何うも假面を被りにくい。心ならぬ仕事をするのが厭である。自分は此兩三年この矛盾に人知れず惱んだ。

而して自分の今の心持では斯う考へて心の上の平衡を兎に角保たせて居る。其れは二重三重の生活だと考へると慊らぬ所、安からぬ所がある。自分は何事をするにも唯だ一重の平面な生活だと考へたい。一枚の平面の上に自分は幾樣の變化ある生活をして居るのだと考へたい。其れで自動的に製作する場合は勿論のこと、他から需め

られて受身に成つて筆を執る時も自分の力量の許す限りを惜まずに出して、其れにも是にも相應の「我」と云ふ刻印を押して置かうと思ふ。純粹の叙情詩、それは自分の瞳の樣な位地を占めて居るものであるけれども、夫れを主として世人の買ふ時代は遠い將來、自分の生きて居ない將來の事である。自分は手をも口をも足をも齊しく充實したる自分の表示だとして時の人の縱覽に任す。自分の一切の述作に自分を僞つた物は一つも無いことを期する。述作のみならず、良人と棲むのも、子供を育てるのも、自分と關係を持つ一切の事は皆自分の實際生活の各範疇である。

忙しいと云ふ事を苦にするのも實は勝手な贅澤を云ふのである。

自分は年に一二度無い時間を差繰つて旅に行く。温泉などの一日一夜は縛された繩を解かれた樣で心も身も伸び伸びする。併し二日三日となると田舍の生活の無爲なのに倦いて、しみじみと仕事のある都會が戀しく、安閑な日送の空虛な感じが悲しい程身を嚙むのを覺えて、張りつめた尖つた神經を持つて居る人々、殊に自分の樣な寂しがりの女は昨日も今日も同じ自然を眺めて暮す田舍には堪へ難く、矢張あとから、あとからと仕事に追はれて側目を振る遑も乏しい都會の生活が適して居る。苦しいのが却て樂しいのである。若し都會に居て仕事が無かつたら、夫れは田舍に居るよりも幾倍か寂しい事であらう。然う思へば自分の忙しいのは幸福である。

文學が既に現代の職業の一つである以上何人にも勸めて好いかと云ふに、自分は我兒にも之を勸めたくは無い。他の職業の大部分は他人の創案や慣例を襲うて行けば普通の教育がある限り何人にも何うにか經營されるものであるが、藝術は然うで無い。個性の最も生粹な發表を要求するのであるから、天分の乏しい生半可な藝術家の一生ほど慘めなものは無い。外面は兎も角、本人の內心の苦悶は一通で無からう。多少の天分を持つて居る者でも自發の泉には間歇がある。常に修養して補はねばならぬ。衣食の計に追はれて居ては修養も容易でない。同輩との競爭の劇烈なのは何れの社會にも免れない事であるとして、其上に世評と云ふ怖しいものがある。意志が弱

く乃至運の惡い者は世評に由つて永久に埋沒せられて仕舞ふ。自分は自ら進んで文學を熱愛する人で無い限り我兒と雖も勸め兼ねるのである。併し之を以て文學を青年に禁ずると云ふ樣な野蠻な教育に贊成する自分では毛頭ない。學問と藝術とは新鮮な空氣と共に幼年の時から一般の家庭で吸はせたいと考へて居る。

偶感と直覺

○かの偉人の書と云ふものに眩暈する勿れ。またかの群集心理に雷同する勿れ、周圍を改造するはよし、周圍に順應すると云ふは、言葉こそ美なれ、自己の降伏なり。

○神とは總ての幻影の記號なりき。神を失ひし人は何の神聖と怪奇と偉大とあらん。唯だ有るものは新異と、平凡と。

○その突如として現はるゝとき何物か新異ならざらん。いろいろの形と色と調と味とを以て肉身は其れに驚き慄ふ。然れども新異の新異としてあるは須臾のみ。いつまでも其れが新異なりと云ふは語をなさず。新異と平凡とは畢竟同一物の上に其存在の時間を區別せんが爲めに與へられたる二個の命題なり。

○トルストイの思想は平凡主義なり。然れども初めて彼を讀めば新鮮を覺ゆ。ニイチエの超人論は新異なり。然れども再び彼れに對すれば平凡の感を禁ずる能はず。何人の議論も何人の事業も終に平凡

たるを免れざるものか。

○存在は價値にも力にもあらず。新異の感を與ふる刹那初めて正に價値と力を生ず。不朽と云ふは總て無意義の存在を意味するならん。

○さるにても我には猶幻影の殘夢に恍惚として、あてもなく喝采し讃歎する習癖の多分に殘れるかな。最も憎むべきは今の世の前代の世に及ばず、我の他に及ばずとする錯覺なり。我に告ぐ、今と汝自身とを措きて汝を刺激することの爾く新異なるものまたいづこにかある。汝は今の人か、過去の人か。汝は他か、我か。

○われは一たび自動車に乘らんことを思ふ。之れ屢乘れる人に聞けば馬車に比すれば興味あり。然れども最初ほどの驚異の快感は無しと云ふ。今日新異とせらるゝ飛行機の如きも、他日は淺草公園に於ける觀覽車とひとしく田舍出の兵士を載せて廻轉するに過ぎざる贅物となるならん。然れども今の我は猶一たび自動車と飛行機とに乘らんことを思ふ。

○憧憬と失樂、驚歎と倦厭、是等の流轉に泣き笑ひすることの面白さよ。不安と動搖とに忙殺せらるゝ日常生活、生きんとする人の跨ぐべき路はこれ。かの安住を云ふはわが知らぬ死の世界の事ならん。

○沒頭せんことを願ふもまた安住を求むるの一種なり。何かの亡靈の影なるべし。

○其物が平凡となれるは其物の圓熟し若しくは普及したるなり。今日の流行となれる婦人問題平和問題の如きも其新異の感を失はざるは恐らく今後四五十年の間ならん。歐洲藝術を東洋人が、東洋思想を歐洲人が驚異の目を以て對するも同じ程の期間なるべし。われは世界の人を擧げて平凡に倦む日の來るを豫想す。其時はやがて世界の人が協力して有らゆる事物の上に空前の新意匠を實現すべき時なり。

○彼れに倦むときに幻滅を唱へ、其れに憧るゝときに空想主義を唱へ、之に執するときに現實主義を唱ふ。これ新異に生きんとする人の特權ぞ。

○天才と能才と凡人との區別の物舊りて無用なるかな。新しき批評家は「その人、その一生に如何ばかり自己を轉換して新異の生活を開拓せるや」を述べよ。

○小遣帳をも楷字にて書し、粗末には附けおかぬ人あり。徒らに摯實を喜べる人に之を告ぐ。之に何の新異なる發見ありや、型の如く總べがきちんと合ひたればとて格別驚くべきこともあらず。不安なき日送りの單調にして睡たかるべきかな。

○われは人心をして政治に倦ましめたる舊派の政治家を憎む。西園寺氏の與黨の桂氏に代るとも依然としてその豫期に空疎の感あらしむ。之に比すれば文界に於ける最近の運動は新異の雜多なる刺激に

富めり。現代の不安を逸早く領解して動搖せるは文界の人々なり。新しき任に就ける閣臣の何人よりも、我等は正宗白鳥氏一人だけの感銘をも受け得ざるにあらずや。

○新異を追ひて生くる人は一面に極めて健忘なる人なり。我等は我上に起れる昨日一昨日の事をも大抵之を忘る。啻に無用となれる事のみならず。今日に記憶し居りて有用なるべき事をも大抵之を忘る。我等は文明生活の繁雜を酷愛する丈その繁雜の滓を健忘に由つて淘汰する術を自然に備ふと云ふべし。生活の上に斯かる大變革ある時代に於て數月前乃至數年前の作物を記憶せられんと望むは望む者の過誤ならずや。文藝學術の著作もまた其日其日の新聞紙とひとしき

性質の物となり、刹那の人ごころを刺激せば足るならん。作者は内心の鬱散活動より生ずる執筆時の苦痛及び愉快と、讀者及び批評家より受くる一時の好惡の聲とにて滿足すべく、讀者もまた著作に對し一時の好惡を感じ、若しくは好惡の聲を作者に酬ゆる事に於て其義務は永く終結するものと見て可なり。永遠の名譽などを期待するは恐らく前代の餘習ならん。

○われは此意味に於て歴史と銅像とを尊重すること甚だ輕少なり、自ら湮滅する人種と古今の藝術とをさまで悲まず。

○然れども我が謂ふ所の意味はかの便宜說と反對す。粗末なる努力を以て一時の間に合せたらしめん事は文明人の堪ふる所にあらず。

いやが上に刺激を求むる心には飽くまでも充實したる糧を要す。總て刹那を攪き亂す有らゆる力强き新異を與へ合ふにあらざれば社會は停滯す。憂ふる勿れ、社會は停滯せず。甲衰ふれば乙代り、常に優良なる勢力ありて進轉し、躍動す。

○張なく煮え切らぬ心を持ちて徒らに物好なる性癖ある人と、現代に一隻の眼なく舊時の夢に沈醋して自大倨傲なる人のみ、今も猶千古の名譽などを空想するならん。君よ、既に千古の名譽を擔へりと謂はるゝ某々大將の顏附の空疎滑稽なるを見ざるや。成吉斯汗も奈破翁も今は我等のお伽噺に過ぎず。

○この世紀は事物の價値を顚倒すれども、併せて事物の價値を眞實

にし、確的にす。無力なる階級より新しき生活の人は出で來らず。而して最も無力なる階級とは貧民にもあらず、判任官にもあらず、勞働者にもあらず、かの大多數の老人準老人これ。彼等は最早新異の生活に就いて憐れなる盲目なり。誰かまた彼等の魅力なき發言に聽くべき。

○われは總てに過程を喜ぶ。過程の複雜にして一見混沌と見まがふ許りなるを酷賞す。結論と幕切とは概ね豫期に反せずして心跳の乏しきを例とす。これ結論をのみ蒐集したる教訓譚の類の青年に愛せられざる所以なるべし。過程に次ぐに過程を以てするものの最なるは人生なり。無盡の鏈鎖に結論を附せんとすることの愚かさよ。

われは此意味に於て有らゆる懐疑家の述作を好む。人生の鎖鎖の一片を手當り次第に引きちぎりて表示するこそ我等の柄に適りたる藝術なれ。

○わが行ふ所、筆にする所の一切には毫も明日までの自信なし、われは今日を營み、今日を記錄す。之を昨日に比しなば甚しき矛盾あらん。われは其れに就いて耻づべき理由を發見せず。寧ろ更により甚しき矛盾を明日以後に生ぜんことを願へり。されば我の一切は過程なり。不安と動搖とに充ちつゝ新異を追ふ所の過程なり。適まわが歌に舊日の濃彩なきを惜む人あるは、われをして家畜の如く一つの馬杭にのみ停滯せしめんとする博愛の人か。

○粗璞なり、天眞爛漫なり、自然なり、などと云ふことを今猶うれしき物に思ふ人々あり。無教育なる婢女の手紙に眞實ありとして作文の例にも引くは斯かる人々なり。廉價なる眞實よ、さもあらばあれ、我にありては斯かる成心と成句とを嫌ふ。我は人工的の一切に味方し、又何よりも我を先づ人工的に改造しつゝあり。文明とはあらゆる人工的の物の結晶を意味す。「自然を征伏せよ」と云ふはよし。「自然に歸れ」とは最早如何なる場合にも文明人の發言すべき言葉にあらず。

○最も元始的なる如き戀愛も今は全く人爲に醇化せらる。「あなにやし愛男」の一語にて戀愛の成立せし世は遠し。若き戀人の呟く所の

曲折多きを聽けば、愛情の內容と技巧も進化せるなり。われは盆踊の唄を喜ぶこと人に劣る。機械の音にまじれる工女の唄の悲痛なるに如かざれば。まして日々の新聞記事の面白さよ。まして新興の科學と藝術との面白さよ。

○我もまた自然を愛でざるにあらず。野菊の一朶は可憐なるものなり、されど有らゆる四季の野の花を年ごとに摘むとも、わが乳を吸ひし兒の年毎に大きくなりゆく喜びには比すべくもあらず。自然は我と何等かの交渉を生じて初めて何等かの存在の價値を覺ゆ。而して自然さながらの自然は次第に文明人と緣の薄くなり行く物なり。園藝家の花は最早自然の花にあらず、われは野菊より庭のダリヤを

愛す。

○藝術の職業化を悲觀する人もまた彼の粗璞と自然とを好む消極主義の人ならん。

○古は野に歌ひき。今は街頭に歌ふ。職業化するは時代の事物すべて然り、藝術家のみ獨水を飲まんとするか。唯だ乙丙丁にありては捨賣するも、甲にありては廉價に賣らざらんとするのみ。

○「自然らしくする」とは安きに就く心持なり、姑息的なり、妥協なり、老人の避難所なり。人工は難きに打勝つなり、意識し、反省し、工夫し、破壞し、創新す。複雜を好む青年の競技場なり、われは踏みはづすとも後の路を行かん。

○我は猶ほ筆を執るに當りて詩と散文との範域を亂す能はず。性に於てはこの一兩年概ね女たるを超え得たる如くなれども。されども我は依然として日本の女なり、その頭惱の粗笨にして言ふ所のくだくだしきかな。

○今宵も雨荒く降る。裂けたる軒を落つる雨だれは書齋の空氣を震はし、身にひたと秋の沁み入るを覺ゆ。東京の霖雨は自暴に痛快なり。年毎に幾回か起る浸水の脅迫を豫知しながら、其れが豫防の施設をなすに遑なき都會人の無力を思ふ時、山の手の高きに住める我を何となく卑怯者の如く感ず。

私の貞操觀

從來は貞操と云ふ事を感情ばかりで取扱つて居た。「女子がなぜに貞操を尊重するか。」斯う云ふ疑問を起さねばならぬ程、昔の女は自己の全生活に就いて細緻な反省を下すことを缺いて居た。女と云ふ者は昔から定められた然う云ふ習慣の下に盲動して居れば其れで十分であると諦めて居た。

けれども今後の女は然うは行かない。感情ばかりで物事を取扱ふ時代ではなくなつた。總てに對して「なぜに」と反省し、理智の批判を經て科學的の合理を見出し、自己の思索に繫けた後でなければ

承認しないと云ふ事になつて行くであらう。

感情をあながちに斥けるのでは無い。女が唯一の賴みとして居た感情は、謂はば元始的の偏狹と、歷史的の盲動とで海綿狀に亂れた物であつた。其偏狹は時に可憐だとして小鳥の如くに男子から愛せられる原因とは成つたが、大抵は其盲動と共に女子と小人とは養ひ難しとして男子から蔑視せられる所以であつた。今は女の目の開く世紀である。其感情を偏狹より脫して深大豐富にすると同時に、其盲動を改めるために、其れに軸または中心となる理智を備へ、理智に整理せられつつ放射狀に秩序ある感情の明動をしようとする時が來た。謂ゆる女子の自覺とは之を基礎として出發し、自己を卑屈より高明に、柔順より活動に、奴隸より個人に解放するのが目的である。

男子は斯う云ふ意味の感情の修練、自己の解放を古くから氣附いて居た。希臘印度の古い哲學より歐洲近世の科學に到るまで、總て要するに男子が自ら全からうとする努力の表現である。女子は殆ど是等の文明に與つて居なかつたと云つてよい。

初心な女だと云はれることは最早何の名譽でも誇りでもない。それは元始的な感情の域に彷徨して進歩の無い女と云ふ意味である。低能な女と云ふ意味である。

氣が附いて見ると、男子は大股に潤い文明の第一街を歩いて居る。

哀れなる女よ、男と對等に歩まうとするには餘りに遲れて居る。我
我は早く此徑より離れて追ひ縋りたい。
總てに無自覺であつた從來の女に貞操の合理的根據を考へた者の
無いのは當然であるとして、あれ丈女子の貞操を嚴しく云ふ我國の
男子に、今日まで未だ貞操を守らねばならぬ理由を說明した人の無
いのは不思議である。
貞操の起原に就いても亦我等は何の敎へられる所も無かつた。
自分の乏しい智識で考へて見ると、元始的人間に貞操と云ふ樣な
觀念を自然に備へて居たとは想像することが出來ない。古代に溯つ
て見れば何れの國民も一婦多夫であり、又一夫多妻であつた。又家

長族長としての權利を男よりも女の方が多數に所有して居た。今
でも西藏其他の未開國には一婦多夫と女の家長權とが古代の俤を遺
して居る。文明國に於ても娼婦や妓女のたぐひは一種の公認せられ
た一婦多夫である。一夫多妻に到つては何れの文明國にも男子の裏
面に誰も認める如く現に保存されて居る。
男子の本能の自躍する儘に女子を選んだ元始的時代に在つては、
後世の男子が我儘に玩弄物の如く女子を選ぶよりも、更に數層甚
しい强壓卽ち暴力を以て女子を掠奪したのであるから、當時の女
子に純潔を持することの出來なかつた事は想像が附く。
其當時の男女は食物を集める事と、舞踏し歌ふ事とに日を送つた

が、男子は特に女子を奪ふことに由つて敵の男子と戰はねばならなかつた。勿論當時の人間には國籍も住所も定つて居ない。水草を追うて浮動する小部隊が錯落として散在した事であらう。今日謂ふ所の如き「家」とか「社會」とか云ふ觀念の無かつたのは勿論である。

男子が他の男子と女の愛を競爭し、一旦我手に掠奪した女を獨占しようとするのは自然の性情である。其處に激烈な嫉妬が起つたに違ひない。或は嫉妬は本來男子のものであつて、其れが女子の性情となつたのは後世の事でないかとさへ思はれる。

女子に自ら純潔を持することの出來なかつた時代に貞操の觀念が女子に自發しようとは想はれぬ。唯だ女子の持つて居たものは甲の

男子を愛して乙の男子を厭ふと云ふ自然の好惡に過ぎなかつたであらう。好惡の感情はあつても其選擇の權利が女子に無かつた時代であるから、好惡は一の感情として存在する丈で、其れを死守する意力卽ち貞操と名づける迄の觀念は成立たない譯である。

之に反して男子には、嫉妬と共に女子を自己一人に服從せしめようとする思想、卽ち貞操を女子に强ひると云ふ事が生じたに違ひない。自分は如此く直覺する。貞操の起原は男子の威壓からである。女子にあつては本來被動的のものである。

男子が一人で同時に幾人の女を獨占することは丁度今も其遺風を傳へて居る土耳古帝の如きものであつた。一夫多妻は最も元始的な

ものである。一夫多妻となれば多妻の間に嫉妬の生ずるのは當然である。女子も遲れて嫉妬を感ずるに到つた。

併し浮動して居た人間が土着する人間となり、「種族的階級」及び「家」と云ふ物を生ずるに到つて、男女の關係は政治的經濟的の關係と共に顚倒したらしい。此時代に於て男子は女の家に行つて婚を求め、結婚した後も男子は女の家に通ふのみで別に一家を創めて共棲することは無かつた。女の家に入聟となることも無かつた。生れた子女は女の家で育てる。女は子女に對して母權と併せて家長權を持つて居た。男は夫としての權利も父としての權利も妻及び子女に對して取ることが出來なかつた。「ちゝ」(乳)と云ふ語が古代に於い

ては父を意味せずに母の稱であつた。

女が家長であるのみならず。引いて族長の權利を握るものも少くなかつた。多くの女酋は現に古事記の神代史に俤を遺して居る。

土着した古代人は戰鬪と農耕と漁獵と商估とを同一人で兼ねて居た。まだ分業は起らなかつた。後世の如く慣質の軟化しなかつた女子は男子と共に其等の事に從つた。女兵はまた神代史に俤を遺して居る。

母を唯一の親として尊敬する所から總ての女の尊敬せられる風が生じ、又一面に純潔を好む神道の如き宗教上の儀式に處女を神巫として奉祀する習慣が出來てから、女子を尊敬することは一通りで無

くなつた。之は前代の男尊女卑の反動とも見られる。

前代に於ては甲の男に掠奪せられ、又乙丙丁の男に掠奪せられて多くの異父の子女を育てた。女が此時代には、「家」と云ふ城壁に據つて男子に對抗することが出來る樣になり、男子の我儘な掠奪を免れることを得たのみならず。反對に男子をして愛情のために歡心を女子に求めしむるに到つた。女が男子を選擇する位地に就いた。上古の歌は概ね男子が其切ない心を女に傳ふる機關であつた。

女が心を許した一人の男子を守らうとしても、男の心は一時その女に傾くのみで、時が經てば變化して新しい女を好んで遠かつて行き、入り代つて他の男が女の心を得ようと努める。男が多妻である

と同時に女もまた勢ひ多夫とならざるを得ないのである。

從つて女は依然として異父の子女を一家の中で育てて居た。

併し家があれば家長として子女を養ふ家產を尊重せねばならぬ事を感じるに到り、女は經濟上の事情から多くの子女を擧げる事を避けたに違ひない。又父を異にした子女の間に感情の齟齬が多くて一家の平和を破る事にも氣が附いたに違ひない。

又一方に種族の階級が隔たるほど、女が劣等な男子を聟にすることは恥辱である。自然男子を選擇する風が行はれて、前代の如く男子の我儘に從つて雜婚することが少くなつて行つたに違ひない。

以上、宗教上に處女の純潔を尊ぶ習慣と、家庭の經濟その他の事

情と、階級的の自重と、此三つの理由から初めて女子が自動的に多くの男子と接することを嫌ふ思想、卽ち貞操の萠芽とも云ふものを生じたのであらうと思はれる。

更に次の時代に入つては前代の反動と社會的事情とからして、男女の位地を再び復古の狀態に到らしめた。卽ち種族との競爭の激甚となるに從つて、戰士たる男子は時代の優者である。女子は殖産と小兒の養育とのために忙殺せられて、最早古の如く男子と協力して戰鬪に從事することは不可能であつた。

又經濟上の事情から多くの家族を同一の家に養ふことが出來なくなり、新婚の男女は雙方の親から讓られた資産を持寄つて別に一家

を建て、初めて夫婦共棲の制度を生ずるに到つた。之と同時に戰士として時代の優者である男子が女に代つて家長となり、父權が母權代つて子女を支配するに到つたのは自然の勢である。

父權が重んぜられ且つ階級が益々尊ばれる樣になつて、初めて父系の血統を神聖視する思想を生じた。女を獨占しようとする男子は更に血統を亂すまいとする思想と相待つて女子の貞操を一層きびしく要求する事となつた。

併し貞操とは女子丈の道德であつて、男子は毫も自己の貞操を反省しないのみならず。依然として一夫多妻が行はれ、屋外に數人の妻を持つのみならず、同一の家に二人以上十數人の妻を貯ふる者も

少く無かつた。女子の權力は再び地に落ち、體のよい男子の叔隷となつた。父の血統を重んずる所から、「女の腹は借り物」と蔑視せられ、「子なき女は去る」と云つて遺棄する事を何とも思はなかつた。

女子は折角芽を出し初めた自動的貞操を蹂躙せられて、再び元始的の外壓的貞操に盲從した。何の理由とも知らず、唯さう云ふ運命の者だと云ふ迷信に諦めを附けて日を送る女が世の中から貞女だと稱讃される事となつた。

男は自分の都合の好い樣に女を奴隷の位地に置いて對等に人格を研くことを許さなかつた。愚に育てられた女は貞女の名を得て滿足し、斯くして今日に到つた。

教育に由て兎にも角にも理智の目の開きかけた今日の婦人が從來の外壓的貞操に懷疑を挾み、貞操の基礎を有らゆる思想の方面と各自の實證とに求めねば滿足が出來なくなつて來たのは其れ丈文明人の心掛に接近したのである。女子の進歩である。

此問題は個人個人の問題であつて一般婦人を共通に支配し得る客觀的基礎と云ふものが容易に發見せられようとは想はれない。當分は各自の持つて居る智識と感情とに由つて研究した結果、獨得の見解を下して其れを實行するより外はない樣である。

體質の優劣と、境遇の良否と、教育の深淺とで各自の心狀態が違ふ以上、又その心狀態の違ふと云ふことを今日の婦人が意識して居

る以上、客觀的な概論に屈從して各自の貞操觀を完成する事は出來ない、客觀的に學問的基礎を與へる事も勿論自分等の內心が要求して居るけれど、更に其中心に根强い個人自身の實證を据ゑるので無ければ滿足し難い。

次に少しばかり自分が貞操を尊重して居る現下の心持を述べて見たい。自分は之を他に强ひようとするのでも、他に誇らうとするのでも毛頭ない。所信を述べて此問題を討究する資料に供したい許りである。

先づ「貞操」と云ふ言葉の意味に就て自分の考を述べると、之には處女としての貞操と、妻としての貞操と二つの區別がある樣に思

はれる。昔は他の男を見て心を動すものは既に姦淫したのと同じだと云ふ考へ方もあつたが、自分は一概に然うは思はない。或時期に達した處女が異性を見て好惡の情を動かし、進んでは戀愛の感情にまで込入るのは、食事や睡眠の欲望と共に自然の要求であつて、欲望がそれにのみ偏しない限り其れを不正だと云つて押へ附ける理由は一つも無い。戀愛は全く自由である。然う云ふ好惡の情や戀愛が自生するので、それに催されて處女が一生の協同生活の伴侶である良人を選擇する鋭敏な又愼重な心の眼も開いて行く。但し如何に戀愛關係が成熟して居ても、終生の協同を目的とする結婚關係に由らずして自己の肉體を男子に許すことをしないのが處女の貞操である。

處女の貞操が專ら肉體的であるのと異つて、結婚後の婦人卽ち妻としての貞操は良人以外に精神的にも肉體的にも他の男子と相愛の關係を生じないことを意味するのである。

自分がこの稿に筆を附けようとした初に今更の如く氣が附いたのは、從來自分が自身の貞操と云ふ事に就いて全く無關心で居たことである。自分は生れて唯一度一人の男と戀をして、其男と結婚して現に共棲して居る事を當然の事だとして、幸福をこそ感ずれ、少しも其れに就いて不安をも懷疑をも挾んだ事がない。一般の女子及び男子の貞操に關して考へた事はあつても自分の貞操は家常茶飯の事の樣に思つて居た。自分の貞操を輕く見て居たのかと云ふと、輕い

も重いもない。てんが然う云ふことは意識せずに過ぎて來た。然う云ふことを問題として輕重を考へて見る必要の無い感情生活を續けて來たのであつた。

處女時代にも結婚後にも不貞の欲望を起さず不貞の行爲を敢てしなかつたと云ふ事が最も貞操を實行したのだとするなら、自分は自然に貞操を實行して居る女だと言つてよい。

健康な人が其方の專門家で無い限り特に病理を研究しない樣に、貞操を破らうとする樣な內心の要求の無かつた自分は、久しい間自分の貞操に就いて顧慮する必要が全く無かつた。必定今後も其必要があるまい。併し自分の貞操觀とでも云ふものを述べようとすれば

自分の經驗を基礎として筆を進めるより外はない。そこで今日まで何故に自分の貞操が自然に守られて來たかと考へて見ると、初めていろいろの理由のある事に氣が附く。

自分には「純潔」を貴ぶ性情がある。鄙近に云へば潔癖、突込んで言へば之が正しい事を好む心と聯關して居る。この性情が自分の貞操を正しく持することの最も大きな理由に成つて居る樣に考へられる。唯だ貞操の上ばかりでなく、自分の今日までの一切は此性情が中心に成つて常に支配して居る樣に考へられる。自分の鄉里は歷史と自然とこそ美くしい所に富んで居ても、人情風俗は隨分墮落した舊い市街であり、自分の生れたのは無敎育な雇人の多い町家である。

從つて幼い時から自分の耳や目に入る事柄には如何はしい事が尠くなかつた。自分が七八歳の頃から自分丈は異つた世界の人の樣な氣がして周圍の不潔な事柄を嫌ひ表面では兎も角、內心では常に外の正しい淸淨な道を行かうとして居たのは、嚴正な祖母や讀書の好きな父の感化にも因るとは云へ、此「純潔」を貴ぶ性情からである。

自分は十一二歳から歷史と文學書とが好きで、家の人に隱して讀み耽つたが、天照大御神の如き處女天皇の淸らかな氣高い御一生が羨しかつた。伊勢の齋宮加茂の齋院の御上などもなつかしかつた。自分の當時の心持を今から思ふと、穢い現實に面して居ながら飛び離れて美的に理想的に自分の前途を考へ、一生を天使の樣な無垢な

處女で送りたいと思つて居たのであつた。

また自分の心持には早くから大人びて居る所があつた。投げやりな父に代り病身な母を助けて店の事を殆ど一人で切盛した爲もあるが、歴史や文學書に親んだので早く人情を解し、忙しく暮す中にも幾分其れを見下して掛かる餘裕が心に生じて居たからであつたらしい。

それで大人びて居た自分は、戀愛などの心持も文學書に由つて十二歳の頃から想像することが出來た。源氏物語の女の幾人に自分を比較して微笑んで居た事もあつた。併し異性に對する好惡の情はあつたにせよ實際に自分自身の戀愛と名づくべき感情は二十三の歳ま

で知る機緣が自分の上に無かつた。常に自分の周圍の男女は都て不潔な人間だと云ふ氣がして、其れで書物の中の男女に許り親んで居た。

一般に處女の戀愛は異性に對する好惡の情が好奇心に一歩を進めた所から生ずると云ふ人がある。併し自分には何等の然う云ふ好奇心も感じなかつた。自分の經驗で云へば、性欲と云ふべきものの意識は處女時代に無い。性欲の記事を讀んでも、男子の樣に肉體的に刺激せられる所は少しも無い。之は男子と生理關係の相違が大變にあるらしい。或る特別な境遇に育つた處女は知らぬこと、普通の處女は自分と同じであらうと想はれる。專門學者から見たなら、處女

の戀愛や男子に對する好き嫌ひの感情にも其根柢には性欲が潜在して居るかも知らぬが、處女には全く其意識が缺けて居るのではないか。若し處女にもあれば、性欲に對する好奇心があるだけであらう。其れとても目に見えて肉體の衝動から自發するのでは無からうと想はれる。而して自分には其好奇心に類似するものすら缺けて居た。

自分が「純潔」を貴ぶ所から堺の街の男女の風俗のふしだらな事を見聞きして其れを厭ひ、又讀書を好む所から文學書の中の客觀的な戀愛に憧れて、自分の感情を滿足させて居たのが、處女時代の貞操を守り得た二つの理由であつたが、嚴格な家庭が實世間の男子と交際する機會を與へなかつたのも亦一つの理由であつた。

自分は學校へ行く以外に家の閾を跨いだことは物心を覺えて以來良人の許へ來るまでの間に幾回しかないと云ふことの數へられる程稀であつた。堺の大濱へさへ三年に一度位しか行かなかつた。自分の歌に幾内の景色や人事を歌ふことが多くても、實際京都や大阪へ行つたことは十度にも滿たないのであつた。其れだけに却つて深い印象が今に殘つて居るのかも知れぬ。勿論學校へ行くには女中や雇人の男衆が送り迎へをする。其外の場合は父や親戚の老人や雇人の婆やなどが伴れて行つて呉れる。全く單獨に出歩いたことは無かつた。

女學校を出てからは益々家の中で許り働いて居た。嚴し過ぎる父

母は屋根の上の火の見臺へ出ることも許さなかつた。父母は娘が男の目に觸れると男から墮落させに來るものだと信じ切つて居た。甚しい事には自分の寢室に毎夜兩親が嚴重な錠を下して置くのであつた。雇人の多い家では――殊に風儀の惡い堺の街では――娘を嚴しく取締る必要のあることは言ふ迄も無いが、自分ほど我身を大切に守ることを心得て居る女を其れ程までにせずともよいであらうに、自分の心持を領解して呉れない兩親の態度をあさましいと思つて、心の内で泣いたことも多かつた。

自分は生來外出を好まなかつた所へ父母が其樣であるから、少しは意地にもなつて、全く人目に觸れない女になつて仕舞はう、誰が

勸めても賴んでも店の薄暗い物蔭以外には一歩も出まいと決めて居た。然うでなくても、兄は東京に學んで居る。妹は京都に學んで居る。弟はまだ土地の中學に居る。店を初め一家の締め括りの爲に自分はどうしても兩親を助けて家に居なければならなかつた。人はお嫁に行てから家政に苦勞するのに、自分は反對に小娘の時から舅姑の樣な父母に仕へて有らゆる氣苦勞と勞働とをして居た。そんな境遇に居たので異性と戀をすると云ふ樣な考も機會も全く無かつた。從つて貞操を汚す樣な男の誘惑と云ふものも一切知らなかつた。

それから之は何時かの「早稻田文學」へ載せた雜感の中にも一寸書いた事であるが、自分は幼い時から動もすると死の不安に襲はれ

て平生少しの病氣もない健かな身體でありながら却て若死をする氣がしてならなかつた。其れが爲め他人の嫁入沙汰を聞いても他人は他人、自分は自分の運命があると云ふ風に思つて、結婚などをする自分ではないと堅く信じて居た。源氏物語の樣な文學書を讀んで作中の戀には自分の事の樣に喜憂することがあつても、其れは夢の世界、空想の世界に遊んで居る自分に過ぎなかつた。

又十七八歳から後は露西亞のトルストイの飜譯物などを讀んで、結婚は罪惡である、人種を絶やして無に歸するのが人間の理想だと云ふ樣な迷信が可なり久しい間自分を囚へて居たので、自分は固より、偶ま逢ふ同じ街の友人にも非結婚主義を熱心に勸めたりなんか

した。然う云ふ樣な事に由つても自分は男子の誘惑から隔つた遠い彼方に住んで居た。

親戚の者から緣談を勸める事もあつたが、自分が汚らはしいと云ふ風に眉を顰めるので、自分の前でそんな話を持出す人も後には全く無くなつた。親達も家に無くてならぬ娘であるから、自分が結婚を望む氣振も無いのを善い事にして格別勸めようともしなかつた。

さうして自分は出來る丈從順に働いて、忙しい家業に心を盡して居た。空想の別世界にも住んで居るが、現實の常識生活にも一點の批を打たれない樣にしようと云ふのが自分の其頃の痩我慢であつた。父が株券などに手を出して一時は危く成つた家產を舊通りに挽回す

ることの出來たのも、大抵自分が十代から二十歳の初へかけての氣苦勞の結果であつた。然う云ふ一家の危機を外に學んで居る兄や妹に今日が日までも一切知らせずに濟すことが出來たのであつた。

自分の處女時代は右の樣にして終つた。思ひも寄らぬ偶然な事から一人の男と相知るに到つて自分の性情は不思議な程激變した。自分は初めて現實的な戀愛の感情が我身を焦すのを覺えた。其男と終に結婚した。自分の齡は二十四であつた。

戀をし結婚をして以後の自分の觀る世界は處女の時に比べて非常に潤い快活なものとなつた。娘の頃の自分の心持には僻んだり、偏したり、暗かつたりした事の多かつたのに氣が附いた。結婚をせ

ねば領解の出來ない事柄の多いことも知つた。

それから今日まで妻として貞操に何の缺けた所もない生活を續けて來て居るのは自分等夫婦に取つて東から日が昇るのと齊しく當然の事として居る。一夫一婦主義を意識して實行して居るのでも、女大學に敎へてある樣な舊道德に壓抑せられて居るのでも無い。つまり初めの戀愛狀態が益々根を張り枝を伸して發達して行くのに過ぎない。良人と自分とは天分も敎育も性情も異つて居る。それでいろいろの彩料を交せながら何處かに引緊つて調和が取れて居る繪の樣に二人の心持がしつくりと合つて居る所に、自分の感情は歡喜と幸福とを得て居るらしい。勿論、不足と不安とは自分等の生活の上に

絶間も無いが、其不足と不安の生活を共にして居ると云ふ事が、自分等の歡喜でも幸福でもある。動搖の乏しい單調な生活であつたなら自分等は或は早く倦いて仕舞つて居たかも知れない。

同じ藝術に從事して生活の思想にも形式にも類似の多いと云ふ事が二人の心の平衡を保つて行かれる一つの原因であらう。又子供に對する愛情を齊しくして居ることも一つの原因であらう。又良人を師として常に敎へられ、親友以上の親友として、不安動搖の生の中に信頼し扶け合つて行く情味も一つの原因であらう。

併し何が自分の貞操を自然に守らせて居る原因の重なものかと考へて來ると、處女時代から失はずに居る「純潔」を貴ぶ性情が其れ

である。良人と自分との間には心の上に虛僞が無い。何事も隱さずに打明けねば自分の純潔を好む心が濟まない。從つて肉體をも純潔に自重したい。不貞なる行爲はやがて不潔である。虛僞である。純潔な肉體は、自分の純潔な心の最も大切な象徵として堅く保持したいと思ふのである。

飜つて處女時代を顧みても然うである。自分は餘程特殊な境遇に育ち、特殊な性情を持つて處女時代の貞操を正しく過ごして來たが、前に擧げた多くの理由には僻んだり間違つたりした心持から出たものも交つて居る。その中で今日から考へても最も正しい理由は矢張「純潔」を貴ぶ性情であつた。

自分には今日まで貞操を破る樣な行爲を望む內心の要求は少しも無く、今後も然う云ふ危惧は夢にも思ひがけないが、萬一さう云ふ不貞な心が起るとしても、其れを豫防するものは此「純潔」を貴び、正しきを欲する性情の威力であると信じて居る。啻に貞操に就いてのみならず個人の尊嚴は此性情を土臺として保たれ且つ發揮せられるものだと信じて居る。

此樣に意識して自分の貞操の地盤を反省し出した自分は「純潔」を貴ぶ性情を主とした上に猶下の樣な理由を新たに加へたい。其れは若し貞操を亂した場合を豫想した消極的の理由ではあるが、今日の自分は斯う云ふ事をも考へて見ずには居られない。卽ち處女時代に

於いて不貞の行爲があれば、處女の純潔は破壞せられたのである。其女は自ら耻と悔とを覺える許りでなく、淑女たる資格なき者として社會から擯斥せられても涙を呑んで忍ぶより外はない。進んで貞淑な人の妻となる資格に缺けた所のあるのは勿論である。斯樣な將來の不幸を豫知する明敏な心がある以上、處女自身に飽く迄も自己の貞操を尊重するのが賢い仕方である。

妻にして貞操を破るとすれば忽ち家庭の不和を生ぜずには已むまい。子女の敎育に就いても母が正義の規範を示す資格を缺くことになる。敎へられざる女は知らぬこと、理智の眼の開いた婦人は之が爲にも貞操を尊重せねばならぬ。家庭の平和と純潔とを亂せば一身の

破滅ばかりでなく、延いては一家の協同生活を危くし、社會の幸福をも害ふ結果が豫想せられる。

學者は種の保存の上からも女子の貞操は太切であると云ふ。學說としては然うでもあらうが、自分には未だ夫婦の血族を保存する爲に貞操を守らうとする自覺はない。其れよりも自分の樣に純潔を貴ぶ性情を基礎としてさへ居れば自然に種の保存の意義にも一致する結果になると思ふ。

以上は專ら自分にのみ就いて述べた。之を自分だけの經驗から出發した特殊の貞操觀であつて、一般の婦人達に及ぼし難いものである事は勿論知つて居る。世の中の婦人の大多數は貞操の堅固な人達

である。自分は其一人一人の特殊な貞操觀を聞きたい。

また再婚をする婦人の心持、良人を定めずして多數の異性に接する稼業の女の心持などは、何う云ふ所に心の平衡を取つて自己を安んじ羞耻を抑へて居ることが出來るのか、其等に就いても經驗を聞きたい。

未亡人と云ふものは故人某の妻である。其れが再嫁をすると云ふことは法律上に姦通ではないにしても、本人の心持は疚しく無いものであらうか。未亡人の貞操觀と云ふものも赤裸裸に語る人があつて欲しい。

また男子の貞操觀をも聞きたいものであるが、其れは男子自身の

正直な告白を待つより外はない。併し自分の想像では、男子は生理的に女子と餘程異つた所があつて、處女には性欲の自發が無いに關らず、若い男子には其れが反對に熾であるらしい。(十月の雜誌三田文學の谷崎氏の小説は其一例である。)また婦人は早く老い易いに關らず、男子は七十歳の老人にも好色の噂を聞く例が多い。特殊な男子を除き、一般大多數の男子が然うであるなら、男子の貞操は餘程趣を異にせねばならぬ筈である。男子は貞操を守るに堪へないとも云はれやう。

それとも、將來は教養ある男子が殖えるに從つて、自己の純潔を貴ぶため、家庭の平和を欲するため、放縱な性欲を自制して一夫一

婦主義を女子と同じく尊重し實踐する樣になるであらうか。また反對に女子も亦刺激に憬れる心や食物其他の變革から從來の體質を漸次一變して性交の欲望を自發し、併せて男子と齊しく老ゆることも遲くなるであらうか。最後に述べて置く、自分の貞操は男子——良人の貞操の如何に由つて動搖するもので無い。自分の肉體を清らかに保つのは自分の心の象徴だとして、何よりも先づ自分の爲に尊重するのである。さうして之は誇るべき事でも何でも無い、自分に取つて當然の事だと思つて居る。

折々の感想

其れが何であらうとも、驚いて胸の動悸が少時は止まない様な變化と刺激とが斷えず生活の上にあつて欲しい。然うで無ければ自分の顔付までが質素になり、險になる。單調な生活を續けて居る人の顔が兎角間伸する様に、微弱な刺激ばかりに慣れて居ては、常に心に空虛な感を免れない。憬れとる云ふこと、驚くと云ふこと、喜ぶと云ふこと、悲歎すると云ふこと、努力すると云ふこと、斯様に心を動搖させつゝ進んで行く人の顔には上氣して血が熱り、生々した色に富む。自分は意識して其方へ向はうとあせつて居る。

全く睦じい夫婦、そんなものが世の中にあらうとは想像も出來ない。如何にいみじい戀愛に由つて結ばれた夫婦でも、折々小波の様に疑惑や嫉妬や不安やが心の上に浮き上る。其れが悲しくもあり、又樂しくもある。斯う云ふ動搖が全く無くなつたら、男女の協同生活と云つても土用の凪の續く長崎の海の様に不愉快なものであらう。又硝子の箱に入れられた京人形の様に寂しいものであらう。

○

この三四年自分の心に二つの反對な氣持が鬪つて居る。一つは求心力とでも云はうか。眼前に起る何の問題をも逃さずに追詰めて、どちらか一方に決着を附けて仕舞ひたい氣持である。一つは遠心力

とでも云はうか、少しでも固定した物事があれば其れを解き放つて新しい狀態に進めたいと云ふ氣持である。而して此二つの悶える心を調攝するものは、湯上りに大きな掛鏡を覗く樣に自分の苦樂をも靜かに客觀することの出來る餘裕を持つた藝術的の氣分である。

○

二歳と八箇月になる三男の麟が、心持は年相應に發達して居ながら物言ひが何うしたものか遲れて居て、瓦斯の火を「ぱつく」と云ひ、牛乳を「ひい」と云つて居る。瓦斯を點けた時の音や、女中が「冷してから差上げます」と云つた言葉などから自身で直感して專用の言葉を案出したのであらう。麟は辭書に無い此類の新語を澤山に

拵へて自身の心持を表現する用に使つて居る。麟と交渉する者は自然麟の言葉を用ひねばならぬ所から、家内の者の總ては勿論、親しくする來客の間にまで何時の間にか麟の言葉が行はれて居る。之で見ると、麟は傳習的な共通の言葉には遲れて居るが、獨特の權威ある新語を澤山に創造して用を足して居る點から云へば、物言が兩親などより進歩して居るとも云はれやう。自分等の歌には專用の言葉が無い。自分の用を足すのに他人と共有の言葉を假りに歌つて居る。其れの方が麟よりも餘程不自由をして居るのでは無いか。他人に解つても解らないでもよいから、自分の言葉で自分を表現した歌を作つたらと、或日ふと麟の傍で思つた。

○

煙草に煙と匂ひとが無かつたなら、自分に戀と藝術とが無かつたなら、枯れると云ふことが無くて地上が雜草で充ちたなら、人類が一人も死ななかつたなら、地球が自轉をしなくなつたなら、何人も同じ位地に固定して進歩も失落もしなかつたなら、斯う考へて自分は今涙ぐむ。繁雜な流轉の世に生きてゐることの幸福に。

○

「輕く受け容れるな。疑へ。究めよ。如何なる物事にも。」之を「女性」の一切と我自らとに告げる。香油、白粉、眞珠を好むよりも、何より新しい女性の好まねばならぬ物は近代の知識と近代の感情と

である。讀書しない女は自ら奴隷の階級に甘んずる者として互に蔑視し合ふ氣風を作りたい。特別に女子の爲にとして作られた書物は總て女子を低能兒たらしめる劣等の書である。男子と共に男子の書を讀み得るので無くては、女子の讀書も畢竟小兒の遊戯に過ぎないであらう。

○

高等遊民と云ふは語を成さない。高等な思想を有つて居る人ならば其人吏とならずとも算盤を彈かずとも決して遊民では無い。其れとも今の世に生れて來ればソクラテスや親鸞などをも非生産的遊民を以て呼はうとするのであらうか。世に高等遊民として心配せられて

居る階級は、その實概ね劣等人の樣である。學校を卒へたと云ふ一事を以て早くも優勢の位地を僥倖しようとする不精者である。自分は越後あたりから東京に來る男女の勞働者を彼等學校の卒業者よりも其點に於て優れた心掛の國民であると思ふ。

○

生活の上に子供を生む機關とのみは男も思はず、女自身も思つて居ない以上、女は或程度まで優形で美くしく有りたい。體育のお蔭で身長の伸びて行くのは好いが、肩幅の濶い、膏ぶとりに肥滿した女の殖えて行くのは恐しい感がする。「俗馬空しく肉多し」と云つた杜甫の句なども想ひ合される。剽悍な軍人を澤山に生んで黄禍論な

どを誘致するのは斯う云ふ女かも知れない。

併し優形を通り越して痩せぎすなのに比べればまだ肥滿した方がよい。男でも女でも肥えた體格の人には年が行く程何處か洪量な所や滑稽な感じやが伴つて來て見た目が快い。其れから又「智慧が總身に廻りかね」と云ふけれども、智慧でなくて、猜疑嫉妬のこせこせした感情や低い物欲などが全身に行き亙らぬとも云はうか、肥えた女には殊に男性的な所が勝つて、淡然とした性情の人が多いやうに想はれる。普通の女が要らぬことに涙もろいヒステリイ風な感情が多くて、其れが理智を亂し曇らせて女自身を禍して居るのは、無學な爲である事は勿論であるけれども、痩せぎすな體格であることが

主要な原因となつて居るに違ひたい。

大和の法隆寺の如意輪觀音や藥師寺の藥師如來などの像がすらりとして缺點の無い優美な姿態を備へて居るのを見ると、其模型となつた奈良朝以前の女の充實した優形の體質が羨まれる。最もあの圓い輪廓をした、表情の靜かな顏附だけは好ましく無いけれど。

○

田舍住居が氣樂であると云つて寄越した人がある。其人の考は都會のやうな競爭の生活は煩しいと云ふ意であるらしい。他人の思想は自由であるから强ひて批難しようとは思はないけれども、今時無爲な生活を望む心は自分に無い。自分は折々田舍へ行つて枯草の

匂ひを嗅いだり、昔の儘の農具で田の收穫をする素樸な光景を眺めたりするのを好む。此間も玉川在の調布村まで預けてある子供の家の病人を見舞に行つて、陸稻の刈り倒された間に蕎麥の花の白い畝の續いて居るのや、小娘が笊を抱へて末生の小さな茄子を摘んで歩くのやなどを見て、ゆつたりと物靜かな淋しい秋の田園の氣持を味つて心まで露に濡れた樣な快さを覺えて歸つて來た。併し何うも田舍は自分に適はしい職業で勞働する事の出來る所とは思はれない。自分の樣な者が田舍へ行けば只管空虛な生活で日送りをせねばなるまい。其れが堪へられないのである。

易に「王公に仕へずして、其事を高尙にす」と云ふ句がある。其

事を高尚にするとは自己の正義と理想とを尊重して其れを貫徹しようとするのであるから自分も其樣な生活がしたい。併し「王公に仕へずして」と消極的に身を處することは今日の人の志でなく、又不可能な事である。支那の昔にそんな事を云つた人は多分時勢に奮鬪する事の出來ない小心不平の政治家で、退いて田園の間に今の謂ゆる地主にでもなつて暮して行ける丈の私產のあつた人であらう。然るに今日では地方の大地主でも種種の方面に活動を迫られ、決して無爲靜閑な生活ばかり出來るもので無い。まして財產も無い自分達が自分に適した技能を振ふことの出來ない地方へ行つては一日の生活も困難であるのは知れ切つて居る。王公に仕へずとも、矢張活

動の機緣とあらゆる刺激とに富んだ都會に居て自分相應の志を高尚にしたいと思ふ。

○

毎月の婦人雜誌に現れる學者先輩の說話が次第に深切に成つて空疎な所の減じて行くのは感謝するけれども、大抵我々婦人の爲めの說話ばかりで、其裏面に學者自身の實際生活の覗はれるものの少いのは未だ物足らない。その說話は立派であるが、果してそれが學者自身の家庭で行はれて居るか何うか、失禮ではあるが或は行はれ難くはないかと忖度される說話も少くない。議論と生活とが分裂して居るのは家庭問題などの場合に特に見苦しいものである。斯う云ふ

場合に學者先輩の出される議論は成るべく御自身の實際生活で裏書をして欲しい。

其れから今一つ物足らないのは、學者先輩の議論に幾年たつても矛盾の少い事である。強ひて矛盾を求める必要もないが、學說でも世の中の事象でも兎角豫期の通りに出ずに意外な推移を示すのが常である。其れが進歩である。一本調子の說話ばかりをせられる學者先輩には何だか進歩が無いのではないかと云ふ疑惑も挾まれて、幾分說話の權威が薄らぐ樣な氣がする。其點になると近頃の文學者の告白には眞摯な所が多い。

五六年前のこと、或る文學博士の令孃の寫眞が桂庵婆さんの周旋

で結婚口を見附けるため、商品の見本の樣に大學生の間を手から手へ廻つて行くのを見て、本人の令孃は御存じない事であらうが、親達の心掛けが善くない爲に斯う云ふ生恥を曝される事だと自分は窃かに御氣の毒に思つたことがあつた。近頃雜誌の上で何う勘違ひをせられたのか、自分の曾て書いた「女子の獨立自營」と云ふ感想を西洋かぶれの暴論だと云つて罵つた人がある。署名を見ると可愛い令孃を賣品扱にして居た先年の博士であつた。其博士なども何うやら進歩の止つた頭腦を持つて居られる樣である。その博士は一度還俗して近頃また東本願寺の僧籍に復した人であつた。

○

容易にあきらめ難い心があつて、其れを苦悶してあきらめるのなら初めて「あきらめ」とも云はれやう。女は二言目にあきらめると云ふけれども、自己の無識を恥と思はず、向上する欲望の不足して居る日本の婦人に何の血の滴る樣な「あきらめ」があらうぞ。

自分は如何なる場合にも「あきらめ」とか「犧牲になる」とか云ふ卑屈な心持を好まない。實際の自分は大抵厭々ながらあきらめさせられて仕舞ひ、犧牲にされて仕舞ふにしても、其れにさらさら自分の本意ではない。何とかして自己の進路を切り開いて通るのが今日の若い婦人の賢い健かな心掛である。心にもない結婚に屈從したり、自身に適しない職業の犧牲になつたりする慘めな「あきらめ」は

此後一切根絶させたい。

○

家庭を過度に難有がるのは迷信である。家庭は我々の育ち、又出でて社會に働き、而して休息に歸る巣だと思へばよい。新しい家庭を營むのも結構であるけれど、社會に立つて活動する實力の充實した男女が單位になつて營む家庭で無ければ、玩具と一般、一時は美くしくても、壞れ易く脆い厄介物に過ぎない。地盤の堅くない家庭がいくら殖えても其れは個人の幸福でも國家の勢力でもないのである。今日頻に家庭を說く人のあるのは若い男女の敢爲獨立の勇氣を早くも中途で挫いて仕舞ふ嫌がありはしないか。昔は「四十未だ家を成

さず」と歌つたものであるのに、中學卒業程度や高等女學校を出たか出ないかの男女に家庭の香氣を嗅がせ過ぎるのは、營養不足の男子と萎縮した良妻賢母とを作る結果に陷るであらう。結婚は男が三十歳女が二十五歳で遲くは無い、其れまでに出來る丈個人としての敎育の充實を計るべきである。

○

平塚明子さんなどの同人で、內容は勿論、賣捌に到るまで一切男の手を借らずに若い女の手で營む文學雜誌「靑鞜」が出た。眇たる雜誌ではあるが之は我國最初の出來事である。小金井夫人、森夫人、岡田夫人、國木田長谷川二女史などの實際に助成せられるのも感謝

すべきことである。田村とし子さん水野仙子さん達の樣な實力のある眞面目な作家が同人に加つて居られるのも心强い。自分は有らゆる婦人界の新進が之に聲援して靑鞜社同人の前途に勇氣づけられることを祈つて置く。

櫛笥のうち

○

實世間とは餘程遠く、惡い意味において實世間を超越して居る古い敎訓談の中でも、情味のあるのは孟子の母の話だと私は思つて居る。あの引越し騷ぎは今の人の心に屢實驗される心持だと思ふ。顏

を顰める親類もあつたであらうし、知人の冷評もあの母親は受けたであらう。それよりも子を善く育てようとする煩悶が燃えるやうであつたことがよく推測される。

○

佛陀に子を育てさせたら第二の佛陀が出來るだけであつて、佛樣に人間は絶對に育て上げることの出來るものでない。父親母親の美くしい煩惱が人間を育て上げるのである。

○

女學校の補習科に居た頃、□□先生が私を別室へお呼びになつて、

「鳳さん、あなたは店番をしながら小説を讀んで居ますね、隱くしても駄目です。私は毎日見ます。私は今にあなたが墮落するだらうと心配でなりません。」

とお云ひになつた。

「先生、私の此頃讀んで居ます本はあれは小説ぢや御座いません。」

と私は云つた。

「嘘でせう。それでは小説でないと云ふ書物の名を云つて御覽なさい。」

先生の疑ひ深い此言葉を悲しみながら私はその書物の名を云ひ得なかつた。それはその書物が先生の知つて居られない名であつたら

先生に失禮であると思つたからであつた。私はその室を出る時涙が零れた。私の藝術や學問に對する鑑賞力が先生の思つて居られるほど淺薄な程度のものであつて、私のやうな境遇に居る人であつたなら誠に小説を讀んでも墮落するであらうと思つたからであつた。

○

十一月二十五日の午後、萬造寺齊さんを賀古博士の耳科院の病室へ見舞ひに行つた。他の病院とは違つて何人も感染すると云ふやうな不安を持たないでも好い處であるからと思つて、七瀬と八峰を伴れて行つた。お父樣が留守になつてから家の内が理由もなしに寂しくなつたと思つて居る二人の子は、外出を嬉しがつて私の袂の兩方

を一つづつ持つて神田を歩いたのであつた。歸りに私でないと女中にはむづかしい買物を二つ三つしようとしたが、つひ五つ六つになつて小さいながら風呂敷包が二つになつた。七瀬が一つの方を持たうと云つたから渡して、神保町の角で電車を待つて居た。五時前であつたがもう少し薄暗くなつて來たので、夜外を歩いたことの少い二人の子は心細くなつたか涙ぐんで居た。新宿行の電車に乘らうとして二人の子は母の手を借らずに運轉手臺へ上つたのであつたが、格別込んで居さうでないのに運轉手は後から空いたのが來るからと云つて中へ入らうとする二人の女の子を遮ぎつた。私の子は口唇を嚙みしめてまた降りて來た。次の車臺も空いては居なかつた。母と

子は一所に乗つて眞中に寄つて立つて居た。もう餘程暗くなつて來た。九段の阪を七分通り上つで丁度兵營の通路の下を二三間來た所で慄へを持つた厭な音がすると思つたら直ぐ電車は動かなくなつてしまつた。護謨の燒けるやうな匂ひがぱつとする。燈りも消えた。十五分程經つた頃から車中の子供が皆聲を上げて泣き出した。私の子も云ふ迄もなく交つて泣いて居るのである。運轉手が動きますよと云つて動かさうとする度に車臺は後へ後へと退る。もう二間位は後へ下つたと思はれる。この暗中の電車はどうなるのであらう。甚しい恐怖が私の胸を襲ふ場合になつた。然しつぶやく人はあるが十二三間の阪の上まで降りて歩かうとする人はまだ一人もない。私は旅に

居る良人が私にさうせよと告げるやうな氣がして、頭を抱へて居た二人の子を放して歩かせて、運轉手臺に行つて降車させてくれと頼んだ。男が二三人降りた。

「あなたは子供を伴れて居るから駄目です、危險です。」と運轉手が云ふ。

「併し、あなたを信用して此方の線路を歩かうと思ふのです。」

かう云つたら其人は鎖をばらりと解してくれた。危いから降りないと七瀬が云ふのを叱りながら降して、荷物を兩脇に挾んで二人の手を取つて歩かさうとしたが、普通の線路とは違つて割合に背の高い横の線がいくつも敷いてあるので子供の足は躓きがちである。壕

と線路との間は一尺に足らない。地獄の道だと思つて歩きながら、此悲しい氣持は坂が盡きれば跡方もなく消えてしまふのであらうか、さうではあるまい、良人の歸つて來る日まで續くであらうと味氣なく思つた。

○

文部省では來年度から實施する積りで高等女學校の教授細目に改正を加へようと計畫して居られると聞きました。近く内閣の交迭と共に久しく煩瑣な形式主義と偏狹な保守主義とで文教の進展を阻害して居た小松原氏が隱退し、新しい文部大臣は文政の御經驗が皆無だとしても兎に角多少自由思想の理解が出來る事であらうと想像し

て私は御參考までに次の樣な感想を述べたいと思ひます。

之は男女一般の教育に亙る形式主義の宿弊ですが、特に女子教育に於て甚しいのは無駄な學課の多い事です。たとへ文部省の精神は然うで無いにしても、結果は徒らに課目を多くして外見さへ完美の狀態であれば其れで好いと言ふ風に成つて居る。

其上に文部省は教師に向つて教授草案の調製を囂しく言ふ。教師は其等の煩瑣な事務的の勞働に忙殺せられ、學校に於る勢力と時間との三分の一は其れに費されて居る。事務的に疲勞した教師が其煩瑣な教授草案に由て施す教育が、潑剌たる熱情を減じて勢ひ機械的申譯的に傾き易いのは已むを得ないでせう。

學生は猶の事、項目ばかり多過ぎて奥行の乏しい、而も教師初め餘り興味を持つて居ない學課に對し、唯學課の時間に追はれるのみであつて、悠揚たる態度や、熱烈な研究心や、周密な注意力やを持て涵養する事の出來ないのは當然です。

教師の教授も機械的、學生の勉強も機械的、之は小學より大學に到るまでの通弊で、其源は文部省の誤つた劃一教育に由來して居る。本年の高等學校の入學試驗に受驗者の國漢文の力が概して缺乏して居た事が偶ま教育界の問題に上りましたけれど、專門學者に承れば國漢文ばかりで無い。數學、語學、物理化學なども殆ど同樣だと申す事です。男子の中學卒業生の學力が然うであるとすれば、更に

程度が低くて更に無駄な學課の多い高等女學校卒業生の實力の乏しい事は大抵想像致されます。

○

無駄な學課の一例を申しますと、高等女學校では「作法」と云ふ課目が修身の一部にあつて、一年級から五年級まで打通して毎週一時間を之に費して居る。普通に女禮式と呼んで居るものですが、何う云ふ事を習ふのかと云へば、煙草盆の持方とか、軸物の扱方とか、お辭儀の仕方とか、嫁入の日の杯の受方とかに過ぎない。女學校の教育を過信して居る父兄達は、然う云ふ行儀作法を教へて頂くのは難有い。殊に一週に一時間位なら他の學課の妨げにもなるまいと考

へられるでせうが、最愛な子女に實質に富んだ文明教育を施さうとせられる父兄達なら、もつと眞面目になつて女學校の教育を批判し監視なさらなければなりません。一週に一時間は決して輕んずべき時間でない。一箇月に四時間、一年に四十八時間、五箇年の卒業までに休暇を除いて少くも百五十時間は之に費されて居るのです。

私は煙草盆の持方などを學術だとは思つて居ない。行儀作法は無論人として心得べき事に違ひありませんが、其等の事は學校（殊に「高等」と冠した學校）で教へる迄も無く、家庭で兩親とか祖父母とか叔母さんとかが折に觸れて注意を與へれば一度で解る事である。家庭で注意する人が無ければ坊間の女禮式の本でも一冊買へば直ぐ

に領解の出來る事である。又然うまで教へたり習つたり爲なくても社會へ出て他人と交際すれば自然の必要から見樣見眞似で覺えられるものであると思ひます。

○

一體行儀作法と云ふものが是非高等女學校で五箇年百五十時間以上も太切な娘盛りの時間を割いて教へねばならぬ程の學課であるなら、中學生其他の男子の學生に對しても同樣の教育を學校で授くべき筈である。世間は女同士で許り交際すると限らない、相手には男がある。女に必要な行儀作法は男にも同時に必要でありますが、男は其方の教育を少しも受けて居ないから凡て無作法かと云ふと決し

て然うで無い、一人前の男は皆其れ相應に行儀作法を心得て居ます。實世間の日常生活に觸れて自然に會得するのです。男は作法などをば少しも學課だなどと思つて居ない。格別注意すべき事だとも考へて居ない。其れで十分社交の用が足つて行く。若し婚禮の席とか何とか特別の儀式の場合は其時に臨んで一寸作法を知つた人に問へば卽座に便じて仕舞ふ。男ばかりで無く、一般の學校教育を受けない婦人でも然うである。彼等は特に教へられなくても皆自分に應じた禮儀を心得て居る。大抵は女學校の教育を受けた女よりも反つて情味の溢れた、行屆いた禮儀を知つて居ます。

之は作法などと云ふ教育をわざわざ女學校で施さなくても好い證

據である。

○

私の最も滑稽に感じて居るのは女學校で小笠原流などの古臭い禮式を教へる事です。禮儀は元來實際社會の必要に應じて進歩すべきものである、日本の日常生活の何處にあの樣な禮式が行はれて居るか。此忙しい日本の活動を重んずる社會に、あのやうな型に入つた人形の樣に靜かな禮儀の必要が假にもありませうか。自分も女學校で小笠原流を習ひましたが、今日迄學校外では少しも用をなさないのです。其れよりか家庭で習つた踊の方が、久しく自分は踊らないにしても人樣の踊を觀る時の參考として益を受けて居ります。

女ばかりが女禮式通に三指をついて、茶や煙草盆を運んだからと云つて、男が然う云ふ迂遠な禮儀を都合よく知つて居て呉れれば好いが、反對に全くそんな禮儀の必要すら感じて居ない。家庭でも社交でも用をなさない禮儀は無駄である。其れを奬勵する文部省は學生に虚榮を戒めながら一方で盛に虚禮を敎へる自家撞着に落ちて居ないでせうか。

時代物の芝居に出るお姫樣の樣にぞろりとした行儀作法が、靴を穿き、テニスを遊び、外國語を讀む女と何の調和があらう。修身のお話に戰國時代の武人の妻を例に引くのと好一對の滑稽である。さう云ふ時代ちがひの物を採用せずとも、纏らぬながらも現代には現

代の禮儀が可成立派に行はれて居て、實世間は其れで少しも不都合を感じて居ないに拘らず、わざわざ女子にのみ其舊式な作法を敎へるのは無用の沙汰、煩瑣な形式敎育の一例ぢやありませんか。

○

今一つの例を申しますと割烹です。之は三年級から初つて毎週大抵四時間を費す學課になつて居る。卒業までの三年間に凡そ四百五十時間を之が爲に割くのです。

屢々申した事ですが、私は此割烹をも亦學術だと思つて居ない。家庭でおつ母さんとか女中とかの手助を必要に應じて爲て居れば、自然に火加減やだし加減の會得が行くものである。他の精神的の學

問や物理化學などと違つて格別師授を要しない。日本人の食物の嗜好と富の度とが破格の激變を來さない以上、たとへ一週に二三度洋食まがひの物を膳に上すとしても、二三の料理書を參考にして多くて十度も仕損じを經驗すれば屹度出來上る事である。左樣な物を學課として、長い時間と、少からぬ財力と、貴重な精力とを費させ、わざわざ學校の教室で勿體振つて教へる必要が何處にありませう。女學校を罵つて高等女中の養成所だと識者が云ふのは不當でない。

日本人の大多數を占めて居る農民達は未だ皆麥飯を用ひて居る。甚だしきは麥飯すら取る事が出來ずに粟や甘藷を御飯代りに常食として居る階級もある。東京を一二里離れた所でさへエゴ芋を茹でて

鹽を附けて常食として居る部落を見受ける。中流の生活と云つても副食物の八分までは野菜である。女學校で教へる樣な洋風の料理などの匂ひも嗅がないで一生を終る中流人も地方には少くない。斯樣な社會の實狀を考へずに、フライ鍋やヘットや舶來の醬油やを要する高價な料理を學課として授けるのは無法である。斯う云ふ點に於ても文部省は女學生の虚榮心を煽り、且つ勤儉を奬勵する度々の訓令を自ら破つて居る。

せめて女學校で教へる割烹が經濟的に出來上るか、手際よく敏速に出來るか、或は普通の廉料理屋で調へる丈にでも味加減が良く出來るかすれば、家庭に歸つた上で役に立つ場合もありませうが、ど

の女學校の先生にお尋ねしても、どの家庭で承つても、一つも此條件を滿す結果を得て居ませんのを見れば、要するに無駄な學課だと思ひます。

もともと料理の巧拙は多年の熟練に俟つべき者で、學校で致す樣に時間づめて機械的に習つたからと云つて急に巧くなれる者では無い。其れに家に由て經濟事情も違へば人に由て嗜好も違ひますから女學校の教室に備つて居る樣な料理の器物が必ず取揃へられるもので無く、又學校で習つた通にして調へた料理が家族の口に必ず適するとも決められません。學校の卒業式などの場合に許り役に立つて家庭では殆ど應用が出來ないと云ふのが現在の實狀です。

○

私の提議に反對する側の人々から、「其れは高等女學校の教育に餘り重きを置くからである。少し氣の利いた家庭では女學校の教育のみで滿足して居ない。卒業後結婚する迄の二三年は何か本人の希望する學問技藝を更に都會へ出して學ばず事になつて居る。又女學校で教へる作法や割烹も何かの場合の參考にならうからまんざら無駄に時間を費す譯でもあるまい」と言はれるでせう。

併し私は猶聰明な父兄達の反省を乞ひたい。其理由は、現在女學校に於て右の二學課の爲に無駄に費される時間は決して少くないのみか、他の必要な學課の時間に比較して餘りに過大であるのです。

女學校で重な學課と云へば誰も數學とか國文とか地理歴史とか作文とかであらうと考へ、其等に割當てた時間が多い事であらうと想像されますが、其れが何うでせう、實際は數學が毎週に二時間、作文が一時間、國語が二時間、地理、歴史、物理化學が各々一時間、裁縫が四時間と云ふ有樣です。其で前に申した一時間の作法は數學や國語の半分、裁縫を除いた他の學課と同數の時間を取つて居る譯になります。又四時間の割烹は數學の時間の倍であり、裁縫以外の學課の四倍に當ります。又大切だと云はれる修身は纔かに一時間ですから作法と匹敵し、割烹の四分の一の時間しか教育勅語の道徳には費されない割合になつて居ます。

煙草盆の持運びや不味い手料理の拵へ方などを習ふ事が、數學や國語や、地理、歴史、作文、物理化學などに匹敵し乃至幾倍する丈の價値のある學課でせうか。苟も常識のある者は、餘り平衡を失した此時間割に驚かない者は無いでせう。之は貴重な娘盛りの時間を空費させる許でない、やがて其多大な時間丈の精力をも併せて徒消させる事なのである。若し其時間と精力とを他の有益な學課に轉用したならば、女學生の學力は現今に倍する事ともなるでせう。私は其れを惜まずに居られません。

○

以上は一二の甚しい例證を擧げたに過ぎません。此外にも無駄な

教授法を緊縮して或學課の時間を減じたり、前の作法や割烹を削減して剩し得た時間で他の學課の程度を高めたり、いろいろ刷新を施すべき箇條が多い樣に見受けます。

作法の中で聟と嫁とに擬して婚禮の下稽古をさせるのなどは生理衞生の學課の中で純潔無垢な十五六歳の少女に對して、如何はしい生殖の話や分娩時の豫習などをさせるのと共に、未だ容易に目覺め相に無い或性情を誘發する刺戟と成る虞のある事柄ですから斷じて廢止すべきものだと思ひます。男子の教育者は斯う云ふ事に疎い樣ですから序に一言しますが、概して女と云ふ者の生理的關係は、野卑な家庭とか、不良な習慣に染んだ友人とか、男子の誘惑とかに刺

激せられない以上、廿三四歳までは自發的に性の欲念を感じる者では無い樣です。周圍が清淨であつて其中にそつとして置けば、白玉の如く蕾の如き純潔な少女心を其年頃まで確かに保つて行かれる者の樣に思はれるのです。之が爲に私は近頃世に唱へられる性慾教育論に對し容易に賛成が出來ません。のみならず前の樣な嫌のある女學校の教育をも厭はしく思ふのです。

私の此感想は、此夏の休暇に上京せられた高等女學校の先生達の御意見をも參考した上で認めました。

二人の女の對話

第一の女　奥様は何時伺つても筆を執つておいでになります。さうでなければ裁物を遊ばすとか何とかして、屹度働いていらつしやいますのね。私なんか働かうにも力は無し、それに働かせて呉れる人も無し、と云つて遊んでは居られない氣質ですから、いろんな事に手を着け出すのですけれど、直ぐ變に心が散つて、何一つ出來上らずに止めてしまふんですよ。輕卒かしいのか、根氣が缺けて居るのか、浮氣なのか、結局私の有つて居る力が足りないんですわね。

第二の女　まあそんなに決めてしまはずにお置きなさいな。あな

たの様な位地に居たら、私だつて仕事が手に附かずに苛々して日を送つて居るかも知れません。ですから何もせずに、しようとも考へずに遊んで居るでせうよ。お若くて、獨身で、そして衣食住の氣苦勞が全くない方と、私のやうに家族を抱へて月々の生活に困つて居る者とは天地が違つて居るのですよ。

第一の女　その御境遇は私にもお察しが出來ます。併しそれに堪へていらつしやるのが私どもの及び難いことの一つなんですわ。

第二の女　どうして、私は自分の境遇に堪へて居るのを自慢しては居ませんよ。私は他から非常に我意の強い女のやうに思はれて居るらしいのですけれど、あなたの御存じのやうに自分は少しでも自

慢なんかの出來る女ではないのですから……。私は近頃筆を執る女の方の皆元氣のいゝのを見て羨んで居ます。どうしてあの十分の一も私には自信が無いのでせう、熱が無いのでせうと思つて。

第一の女　御戯談でせう。自信も、熱も、根氣も、實力も何も無いのは私ですわ。ああもしよう、かうもしようと欲だけは多くて。

第二の女　よしませう、人が聞いたら二人で謙遜をし合つて居るやうに取るでせうから。……私は此四五日煩悶をして居るのですよ。仕事に就いてですよ。しようとすることは力が足りないし、と云つて一日でも働かずに居ては一家が飢ゑてしまひます……

第一の女　先生に代つて働いてお貰ひになりましては何うです。

あなたはお身體の休養をなさりながら氣樂に讀書でも遊ばしたらよろしいんです。

第二の女　さうです、私も讀書の時間を得たい、思想の修養がしたいと常々思つて居るんです。近頃は雜誌さへ讀むことが出來ないんですもの。けれどあの人は外から勸めて働く人ぢやありません、働く時が來たら働くでせうよ。それは私はあの人に自分が働くやうにぞんざいには働かせたくないと以前から思つて居るんです。

第一の女　ですから御一方では猶更お惰けになりますわ。

第二の女　さうでせうよ。併しあの人は詩人です。私はあの人の事が癪に障つてならない時でも、あの人の詩の才を想ふと何もかも

一切忘れて、あの人を尊敬したくなります、愛したくなります。世間はあの人を棄てゝ居るでせうが、あの人は決してあの人自身を棄てゝ居ません、じつと自重して居ます。そしてあの人の少數の弟子と私とがあの人の未來に期待して居ます。

第一の女　何方を向いても眞實の事を話して下さる人がありませんのね。水晶のやうに透徹つた心を見せて下さる人がありませんのね。皆いゝ加減な表面なことを云つて居る人ばかりですのね。妥協と假面とでなくては通れない世間になつてしまつたのでせうか。私に結婚を勸める人の言草なんかを聞いて居ますと、それは滑稽ですよ。獨身で女の盛りを過ごしてしまつては生甲斐がないなんか云つ

て、其人はさも生甲斐と云ふことが解つて居さうな口振なんです。さう云ふ人は何でも新しい流行の語を口實にして他人に親切を賣らうとする外に何の考へもないのですね。

第一の女　あなたのやうに自由に飛んで歩いていろんな人に出會ふ機會の多い方は、觀やうと思ひやうとに由つては複雜な世間の眞相が解つて面白いぢやありませんか。それに妥協だの假面だのは世間の事で、あなたには其必要がおおありにならないのですもの、誠にお氣樂ですわ。獨身で居たい間は獨身で居られると云ふのも、家庭や世間と妥協せねばならぬ境遇にあなたが入らつしやらないからぢやありませんか。

第一の女　いいえ、違ひます。そのいろんな人に出會ふと云ふのが私には非常な妥協ですわ。一度でも私の思つてる通りの眞實の事を云はうものなら、其人達は避けて近寄らなくなります。私は去年の春あたりは自分を立て通さうと思つて、出來るだけ色合と線とをきつぱり鮮やかにしましたの、さうすると、私が性格や學問技術の點で尊敬して居る友達がみんな危險がつて遠ざかつてしまつたぢやありませんか。そして私の周圍に殘つて居るのは、心の膚のがさがさと粗い、唯だ口達者な以外に取柄のないやくざな女や、わたしの思想を見ずに私の影を見、その影を誇大してその側に寄つて住まねば行き所のないやうな意氣地のない男やなんかばかりになつてしま

ひました。私はそんな連中にばかり伍して居るのは厭です。と云つて孤立しては居られません。淋しくてなりません。それで矢張り妥協の生活の方へも出掛けて行きます。すると第一私は男女の性の別や家柄の相違なんかを全く心頭に置いて居ないのに、相手の方では何事にも一一其れが除外することの出來ない條件になつて居ますでせう。其人達と交はつて行くには、私も矢張りさう云ふ愚にもつかない條件を眼中に置いて、遠慮したり、控へ目にしたりしなければならないのです。

第二の女　けれど、あなたの生活は失禮ですけれどまだまだ御遊戯です。とにかく自由意志で進退し得られる餘裕がおありになる。

私は進むにも退くにも世間の壓迫を感ぜずには居られない境遇に居ます。そして世間の壓迫を突破し切らずに、次第に其れと妥協して行きながら、假にも妥協することの出來ない他の一面の自己との爭闘に惱んで居るのです。

第一の女　ぞんざいに働くと仰つしやいましたが、あなたも失禮ですが精神的とか物質的とかにお仕事を分けておいでになるのですか。

第二の女　いいえ、以前はさう云ふ風に人生を見ましたけれど、今の私は心と物と、靈と肉との區別を立てる氣になれないで、靈と云へば靈、物と云へば物、用語は何れにしても一元に見て居るので

すから、精神的だから高尚だとか、物質的だから卑しいとかは考へないのですよ。そんな名目は人生を外から眺めて冷やかに附けた餘計な區別だと思つて居る位ですもの、わたしの惱んで居るのは、そんな事でなくて、自分の全肉を擧げて沒入することの出來る仕事に際會したいと、唯それ丈です。變な語づかひですけれど沒頭の代りに沒肉したいのです。

第一の女　では沒肉の出來ない仕事は勢ひぞんざいになると仰つしやるのですか。飽くことを求めながら何時でも飢ゑて居る心持は、それは私の生活と同じです、よく私にも解ります。

第二の女　いいえ、其處があなたと私と異ふ所だと思ふのですよ。

あなたは、氣分を重んじて居る人です。氣分ばかりで動いて居る人です。私にもあなたと同じ日がありました。けれど今の私は氣分の儘に生きて行かれる世界に住んで居ません。また私と云ふ物が延長して居て、とても氣分ばかりで掩ふことが出來なくなつて居ます。

第一の女　あなたはあなたの外に家族がお有りになると仰しやるのでせう。其れはあなたも私の生活を外から觀察してのお考へぢやありませんか。如何にも私には家族を養ふ苦勞なんかありません。わたしは氣分の變化に從つて動いて居ます。併しいろんな自覺と欲望とは私にも澤山あります。其れがどんなに私の繫累になつたり、矛盾の苦痛を生んだりして居るかお解りにならないのですわ。

第二の女　お互に解し合ふことが出來ないのかも知れませんね、併しどうにかして解し合ひたいとはお思ひになりませんか、解らないと云ふ程淋しい事はないのですもの。それで、もつと話を進めませう。私は自分の外に家族があるとは思つて居ないのです。あなたは御自分の外に御兩親を眺めていらつしやるか知れませんが、わたしの家族はわたしの内にあります。私と云ふ物が延長して居ると云ふのは其れを云ふのです。家族と共に生きねば、少くとも家族と共に生きる方向へ動かねば私は生きて行かれないのです。

第一の女　それでは……

第二の女　餘りに物質的だと批難なすつてもわたしは厭な顏をせ

ずに「私の生活は物質そのものだ」と答へます。私自らも之は非常な變化だと認めて居るのです。以前の單純であつた自分と比較して我ながら目のうるむこともありますが、之が今の私の眞實です。そして他から強ひられたのでなくて、私自らが作つた世界でも、私は仕事の種類を擇びません。其れがわたしを完全に生かし得る仕事、云ひ換へれば、私に側目を振らずに沒肉して働かせる仕事でなければ駄目です。以前は氣分や空想や實感に誘はれて一首の歌にも全肉を沒入することが出來ました。今の延長した私はそんな狹い甘美に醉つては居られない。そんなことに一日でも全肉を向けようものなら忽ち家族が餓死せねばなりません。自分を沒入しないでする

仕事がぞんざいになるのは當然でせう。

第一の女　それでもあなたは平生どんな仕事にも興味を有つていでになる樣ぢやありませんか、私のやうに又しても「厭だ、厭だ」とは仰つしやらないぢやありませんか。

第二の女　さうですね。私の力で出來さうな仕事なら何でも私は可愛ゆくて抛り出したくないのです。尤も同じ事を繰返すのは厭ですから仕事の變化を求めて居るのですが、唯だ自分の生活の單調を破るために變化を求めるのならいゝのですけれど、この仕事にばかりかゝりあつて居ては家族と一所に飢ゑねばならない、生活を充實する所でなく却て生活を破壞することになると思つて、斷えず不安

と焦躁と恐怖とが、早くこの仕事を切り上げて他の仕事へ移らねばならぬと云ふ自覺を私に迫つて苛々させます。勢ひ仕事の質よりも量を貪ることになつて行きます。仕事に面と向つて居る時は可なり全力を傾けて居る積りでも、悠揚と構へてするのと苛々してするのとは、どうしても仕事の出來榮に精粗の差がありますよ。

第一の女　それは逆境に處した昔の豪い作家の傳記を見ても同じやうな煩悶に滿ちて居ます。謂ゆる靈と肉の戰ひは生活意志の强烈な人程悲慘なんでせう。

第二の女　昔の天才の煩悶は平凡な私のと内容が非常に違つて居ます。今のあなたの煩悶とも違つて居ます。今の新しい女と云はれる

人達の煩悶とも違つて居ます。其れに比較したなら私のは極々下卑た煩悶なんです。昔の天才は地から天を望み、靈と肉とを分ち、地と肉とを侮蔑して居ました。今の人は反對に肉を重んじはするが、あなたでも新しい女の人達でも肉の半を愛する丈で肉の他の半を餘りに冷視なすつて居ます。私は次第に私の肉が肥大して行く、そして其肉の全部を愛せずには居られなくなつて行く、私は自分の肉で自分の肉の養ひ切れないのに悶えて居るのです。

第一の女　あなたの立場からお考へになれば然うでせうけれど、私は自己と云ふ物を當分まだ狹い私一個の肉に限つて置きたいのです。家族を冷淡にも見て居ませんが、其親しさの度は友人と餘り差

のないものだと思つて居ます。家族は家族で何うにか生きて行くでせう。それよりか私自身が何う生きて行けばいゝのか。第一自身の身に就いて解らないことが無數にあるのですもの、其れを研究するのに焦躁つて居るのです。

第二の女　あなたと私とは氣質の相違もありますが、境遇と年齢の相違が非常に生活の距離を作らせて居るのでせうね。あなたの生活は奔放で、快濶で、上品。私の生活は窮屈で、悲慘で、下品……

第一の女　奔放とはだらしないこと、上品とは間の抜けたことでせう。

第二の女　そんな皮肉を云つて居る場合ぢやありません。私は全

くあなたの自由を羨んで居るのです。若し假に今私が遽にあなたのやうな境遇に立つことが出來たら何んな事をするでせう。自分の生活を細く深いものにして全力を注ぐでせうか。例へば藝術のための藝術と云つた風な仕事に働くでせうか、其れとも淺くとも濶い生活を志して、全人類の生活の向上と云ふ風な仕事にまで働くでせうか。

第一の女　餘計な御想像ですね、あなたも境遇が變つたら生活も一變するとお考へになるのですか。

第二の女　勿論ですわ、境遇を外にした生活と云ふものが考へられるでせうか。新しい生活は新しい境遇を作り出すことぢやありま

せんか。殊に私は清貧を樂むの、貧富の外に超然として居るのと云ふやうなことは、弱者の負惜みでなければ、聖人の假聲を使つて自ら高しとする腐儒氣質の餘風だと思ふのです。財力が加はらないで世の中に何が創造されるのですか、財力を卑しい物のやうに思ふのは財力もまた人間の力の發揮された物だと云ふ自明の理を閑却して居るからです。私はロダンの藝術の偉大なのは、佛蘭西人の心强い生活が背景となつてロダンの天才を生んだからだと思つて居ます。佛蘭西人の生活の心强いのは財力の豐富なのが其重大な理由の一つぢやありませんか、ロダンの彫刻の前に立つて誰れが清貧な淋しい人間生活を感じませう。誰れが貧富の外に超然たりと云ふやうな人

間ばなれのした空靈の世界を感じませう。人が亞米利加人を厭がるのは財力の外に殆ど何にもないからです、財力その物は尊重すると卑しむべきものではないと思ひます。

第一の女　けれど私の家のやうな生活は、あなたのお考へになるやうな心强いものぢやありませんよ。幾つかの銀行と會社とに關係することの出來る財力がある爲に、どれ丈私の親達は世の中で僞善者になつたり僞惡者になつたりして居るか知れないのです。私は親達のして居る生活の虛僞と薄弱とを眺めると、つくづく氣の毒に思はれます。全くの盲目になり切らない親達は折々その生活の馬鹿らしいことに氣が附かないでもないでせうが、今では僅ばかしの財產

と社會上の位地とに壓されて、親達の良心と愛情――眞實の姿は小さく蹋蹐つて居ます、私に對する愛情にしても餘程不純な分子が混つて居ます、私にまで妥協の世渡りを敎へようとするのですもの。

第二の女　御兩親の攻擊はおよしなさい、時代が違へば思想も違ふ筈ですから。それよりか若い者同志が第二の舊い親達にならないやうに警戒しようぢやありませんか。

第一の女　さうです。あなたが世間の富豪や富豪を取卷く學者、敎育者とか、政治家とか、社會改良家とかの、裏面を御覽になつたら、一日でもそんな仲間へ入つて一所に仕事なんかなさる氣になるものですか、財力の階級の醜いこと、詰らないことに私は愛想を盡かして居るのです。

第二の女　それはよく解つて居ます。でも好く考へて御覽なさい、あなただつて財力から離れて私のやうな其日暮しの眞似はしたくないでせう。何と云つたつて三越へ毎月自動車を横附けにして買物をなさる丈でも强者の生活なんですからね。一ヶ月筆を動かさなかつたら一家族が全滅せねばならないやうな境遇とは比較にも何にもなりませんわ。

第一の女　氣まぐれで云へば、さう云ふ未知の境遇に身を置いて世帶窶れと云つた趣も經驗して見たいと思ひます。人は兎角他人の境遇を羨ましがるものなんかも知れません。けれど、眞面目に考へ

て見れば、私は現に立つて居る境遇を出發點として自分の生活を切り開かねばならないのだと思ひます。何時も自分の呪つて居るこの境遇の外に私の境遇は無いのですから。私は今の境遇を寧ろ不幸だと思つて居ます。習俗に順應する空氣の中に浸つて居るのですもの。私が繪を描かうとしたり、音樂の方へ手を出したり、文學を覗いたりするのは新しい生活を作らうと努力して居る積りなのですけれど、やつぱり釘附けにされて居る境遇を姑く逃避して夢を見乙居るのに過ぎませんわ。

第二の女　あなたがお米の値段を知らないで濟む御境遇を不幸だと仰しやるのと、私が大勢の家族を抱へて其反對の境遇に惱んで居

るのとは大變な相違だと思ひます。お互に自己を内から眺めるだけの眼が開いて居ることは同じだと云へますが、あなたは翼が授けられて居るのに、私は徒歩で、おまけに迂路を取らねばならない境遇に居るのです。

第一の女　私の授けられた境遇を巧に運用せよと仰つしやるのでせう。あなたはまだ私をもあなた御自身をも外から見ておいでになりはしませんか。私は斯う思つて居ます。今の世に比較的最大の自由を得て居るのは藝術家と新聞記者と辯護士で、最大の不自由を感じて居るのは第一に中流以上の娘、それから宗教家、教育者、學者、官吏であると。思想と行動との一致した自由を一番多く得ておいで

になるのはあなた方の藝術家ではありませんか。私の境遇が何うして大膽に運用することが出來ませう。

第二の女　之は他人の寶を數へるやうなものですけれど、若し私があなたであつたら、眞實に世界の人になり、世界にある一流の天才に追隨する心持になつて、悠揚と張り切つた態度で藝術の生活に沒肉しようと力めるでせう。御兩親は可なりあなたの自由を許していらつしやるのですから。

第一の女　藝術に國境がない以上、今だつてあなたは世界の人として獨立した思想を持つておいでになるぢやありませんか。

第二の女　それはあなたの樣な境遇に居て藝術生活を營む人の

ことですよ。私の藝術は賣らねばならない。買手を求めるからには勢ひ日本を餘計に眼中に置くことになります。勿論日本の土から生えた私は日本をどの愛國家にも讓らない程に愛して居りますけれど……

第一の女　私は折々日本の中に孤立して居る感じを覺えるのですが、あなたはどう日本を見ておいでになります。

第二の女　私は日本をさう冷淡には見て居ません。どうすると偶然に自分を取卷いて居る環境に過ぎないと思ふこともありますが、近頃は自分が日本と云ふ地に置かれたのは偶然でなくて、何か神祕な意義のあることのやうに感ぜられてならないのです。よし其れが

偶然であるにしても、此地に久しく育まれた日本人の血を受けて居る以上、そして日本の地を離れては生きて行かれない境遇に居る以上、また歴史や藝術や自然や人事を通じて、日本と云ふものが私の肉に深く喰ひ入つて居る以上、勢ひ自分が日本に住んで居ると云ふことを意義のあることにして考へなければならないのです。

第一の女　さう云ふ漠としたお考へからあなたは日本を愛していでになるのですか。私は日本を憎んだり蔑んだりする感情が先に立つて、日本に生れたと云ふことを寧ろ運命に咀はれたのだと思つて居ます。歴史上一人の天才らしい大人格さへ持つて居ない日本人ではありませんか。あなたもよく仰しやる、やうに生活意志の微弱な

日本人は、幾つかの漁村を繋ぎ合せて引き伸して少し手入をしたやうな木造家屋の紙の戸の中に住んで、其れを都市だの街だのと云つて満足して居る現在の狀態ですもの、萬事は推量することが出來ます。

第二の女　日本人の生活が昔から一體に微温かつたことは御同感です。歐洲人に比べては勿論のこと、支那人に比べても非常に恬淡な生活をして來ましたが、其れは外國の生活に刺戟せられる機會の少い地勢に住んで居たのが禍して居るので、私は日本人の生活意志が必ずしも强烈でないとは思はないのです。冒險心に富んだ我々の祖先が此國に移住して來た頃の記錄だと思はれる神代史に現れた日

本人の勇邁な生活欲は、歐洲諸國の祖先の其れと少しも異る所がないのですが、但し其生活欲が武力に偏して現れて居て、三韓の交渉時代、源平時代、南北朝時代、元龜天正時代、何れも日本人の生活意志が積極的に動いたかと思はれる時代は殺伐な武力が動いて居るのです。大化の革新以後奈良朝の文明と云ふものは多少文物の上に生活欲が動き出したのですが、要するに明治の革新と同じやうに外國思想の模倣に終つて居ます。平安中期の藝術的生活が日本人の獨創を見せて可なり華やかなやうでも、藤原氏の衰へたと共に頓挫してしまつた程の實質の乏しいものであつたのです。鎌倉時代の宗教や、德島時代の學問藝術と云つても、寧ろ日本人の生活意志の消

極的に諦めを附けた表現に適ぎなかつたのです。併し其れを以て日本の國民性を悲觀はしません。過去を以て將來を推すと云ふ程無意味なことはない。現に今度の歐洲の戰爭でも軍事通の豫測と云ふものが一つも適中しないではありませんか。人生には突發があり、飛躍があります。日本人の生活欲が過去に於て十分に發揮されなかつた丈に、將來に於て豐富に發揮される可能性を持つて居ると云はれないこともないでせう。

第一の女　私は國民性などと云ふものを眼中に置く必要がないと思つて居ます。牛が大勢集つて居る臭氣であつて、其れが馬の大勢集つて居る臭氣と異つて居るからと云つて、その臭氣が必ずしも直ぐ

牛の價値にはなりません。たとへそんな事が國民の色別でもする爲に役立つにしても、其れは甲の國民から客觀的に乙の國民を眺めた時に云ふ言葉で、外國人から眺めて英國風と云ふものがあるにしても、英國人自身は何事も英國風で行かうと意識して居る譯のものでないでせう。日本人がどんなに久しく佛蘭西に居て、佛蘭西人の精神を呑み込んだ積りで繪を描いても、佛蘭西人から見ると何うしても日本人が描いた油繪であつて、日本人臭い所を免れ得ないと云ふではありませんか。國民性は閑却して置いても自然に滲み出すものでせう。

第二の女　世間で國民性と云つて居るのは、あなたの仰しやるの

とは意味を異にして居て、日本人の生活に共通の基調をなして居る精神とでも云ふものを指すのではないのですか。若しさうであるなら過去は知らず、現在に於て日本人の生活の底に流れて居る共通の精神は、個人の獨創力と勇氣とを萎縮させて、唯だ目前の利害のために群衆が互に妥協し順應する精神です。其れが何で有難いものですか。

第一の女　歐洲人に共通して居る現代の精神は自由と獨創と活動の精神のやうですが、日本人の生活の何處にもまだ歐洲の其等の新精神と匹敵するに足る力强い生活は營まれて居ません。創造の哲學とか生動の藝術とかの議論は行はれても、其れは歐洲から輸入せら

れて外面的に流行して居る思想に過ぎないでせう。國民性と云ふ言葉を世間で云つて居る意義に解して見れば、その内容はあなたの仰つしやる通りに弱く醜いもので、其れは却て日本人が第一に自ら排斥せねばならないことなんです。

第二の女　或はまた學者とか教育者とかの側では、國民性と云ふことを特に日本人の或美しい情操の一面に解して、例へば在來の忠孝道德を維持するやうなことが國民性を維持して行くことのやうに思つて居るかも知れませんが、其れは過去に役立つたものを現在に「役立てようと云ふ保守思想であつて、其れが現在の生活に役立つ間はよくても、既に役立たなくなつたものを強ひて役立てようとす

れば却つて現在の生活を阻害し沈滯せしめる結果になつて行くのは解り切つて居ます。

第一の女　忠孝道德と武士道とだけを現在の生活の基調にしようとするやうなことは、さすがにもう多數の日本人は考へて居ませんが、その代り骨の折れない妥協根性と云ふ物を今日の國民性にして虚僞の日送りを續けて居るのですね。ですが、私は其れも無理はないと思ふのです。歐洲人に比べて此樣な菜色をした微弱な肉體からどうして强烈な生活意志の醱酵することが望まれませう。第一食物からして野菜本位の國民ですもの、旺盛な欲望の萠す譯がないと思ひます。獨逸あたりでは肉欲を制するためにわざと菜食主義を實行

して居る人があると云ひますけれど、日本人は凡てが本來の菜食主義者なんですよ。

第二の女　私が國民性と云ふ語をうつかりと用ひた爲に話が側道へ入つてつひお互に日本人を罵るやうな事になりました。日本人を罵るのは結局お互自身を罵つて居るのですからいい氣持はしませんのね。それともあなたは痒い所を搔き破るやうな快よさでもおありですか。……私の云つた國民性は生活意志の替名に過ぎないのですよ。そして私が國民性を悲觀しないと云つたのは、日本人の肉に强烈な生活意志が潛在して居ることを信じるからです……

第一の女　どうしてそんなことにお信じになれますか、一時の景

氣づけで私に失望をおさせにならないやうにして、どうぞそのお話をお進め下さいな。

第二の女　明治維新の變革と云ふものは久しい間鬱屈して居た日本人の生活意志が內から燃え出したのと、歐米の文明に外から刺激されたのとで積極的に動き初めた現象であつたのでせうが、惜しいことに其れを指導する天才が居なかつたので、當時の新人は最初の意氣込みに似ず、暫くの後に政閥、軍閥、財閥、學閥を造つて利己主義の墻壁の中に立て籠つてしまひ、明治の初年に勃興した快濶な自由思想は瞬く中に重苦しい權力主義に換つて、其れが第二の新人の進路を壓へ附けたのですから、誰も自我を曲げて妥協の中に間に

合せの生を送る今日の變態を生じたのですけれど、今日は國民の智識階級が凡て暗默の間に不滿と焦燥とを感じて居て、決して妥協生活に全身を浸して因循しては居ません。言ひ換へればどの社會の思慮ある人にも慊焉たる色が漲つて居ます。私は之を見て、虚僞の生活に堪へ切れないで眞に獨立した生活を取らうとする欲望が日本人の内に再び醱酵して居ることの暗示を感じるのです。

第一の女　獨創性が缺けて居るので小賢しい模倣性で彌縫し、財力が乏しいので恬淡に甘んじて居る國民の將來がどうして樂觀せられませう。私だつて日本人が土耳古人や馬來人の位地まで落ちやうとは考へないのですけれど、何時迄も外國思想のお蔭を被らねばな

らないやうでは、勢ひ永久に第二流の國民たらざるを得ないのではありませんか。憂鬱の色は馬來人にも印度人にもあります。其れを復興の暗示だとお取りになるのは臆斷でせう。此國には斷えず不滿を口にして何の實行もしない機械人形も澤山あるのですから……

第二の女　私は日本人が此妥協生活の壓迫に惱めば惱む程それに反撥する自我の力が猛烈になるだらうと思ふのですよ。決してその壓迫を回避してはならないし、また回避することの出來ない私共の階級では唯だ眞直に衝突つて行く外はないのです。案じるより産むが安いと云ふこともあるのですから、さうして血塗れの對戰を繼續して居たら、その中に私共の自我が必要な丈の抵抗力を備へて、强